

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第223集

MATUNOKI

松ノ木遺跡Ⅲ

長野県佐久市岩村田松ノ木遺跡 第Ⅲ次調査

2014.3

佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第223集

MATUNOKI

松ノ木遺跡Ⅲ

長野県佐久市岩村田松ノ木遺跡 第Ⅲ次調査

2014.3
佐久市教育委員会



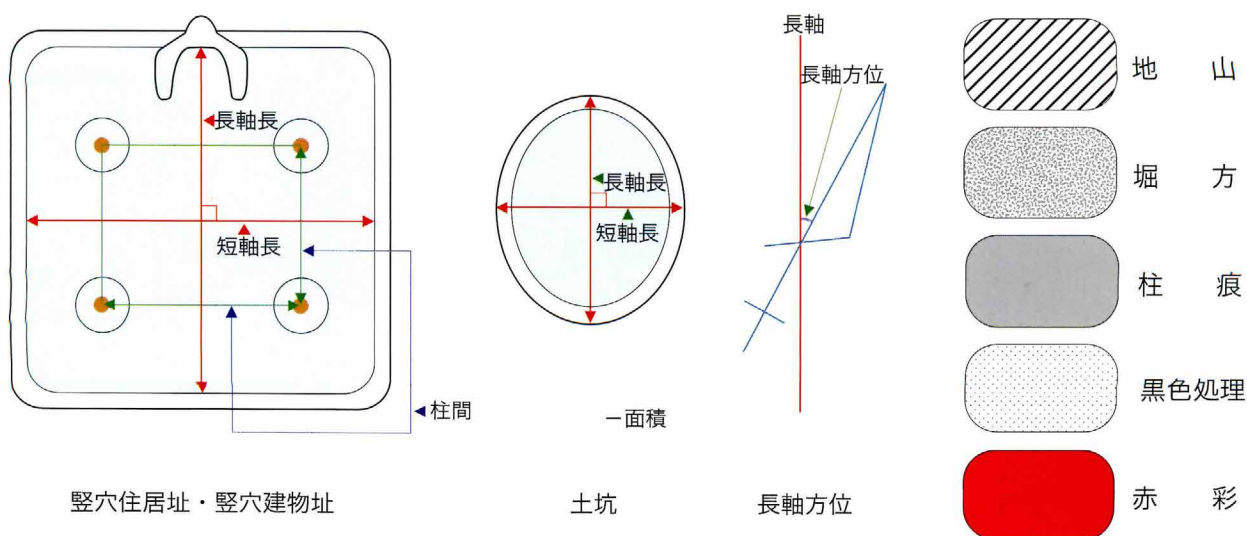
松ノ木遺跡Ⅲ全景

例 言

- 1 本書は長野県佐久市に所在する松ノ木遺跡の第Ⅲ次発掘調査報告書である。
- 2 調査は東信土地改良事務所が行う県営圃場整備事業に伴う記録保存を目的に佐久市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡名及び所在地 松ノ木遺跡Ⅲ（I MNⅢ）佐久市岩村田字松ノ木
- 4 調査期間及び面積 発掘調査：平成10年6月8日～7月9日
 整理：平成10年12月14日から平成11年3月31日
 平成25年5月15日～平成26年3月31日
 調査面積1,500㎡
- 5 発掘作業及び平成10年12月14日～平成11年3月31日までの整理作業は原因者負担により実施し、平成25年5月15日～平成26年3月31日までの整理作業及び報告書刊行は全額を国庫補助金及び市費の公費により作成した。（平成25年度市内遺跡発掘調査事業）
- 6 本書に掲載した地図は佐久市発行の都市計画図（1：2,500）、佐久市教育委員会作成の遺跡詳細分布図（1：5,000）である。
- 7 本書に掲載した遺構図は、簡易遣り方測量で作成されたものを図面修正し、Adobe Illustratorでデジタルトレースし作成した。
- 8 遺物実測図は手取りで行い、Adbe Illustratorでデジタルトレースし作成した。
- 9 遺構写真は当時の調査団が撮影したものをスキャニングし、遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、Adobe Photoshopで補正等を行いAdbe InDesignで版組を行った。
- 10 本書の作成は小林が行った。
- 11 本書及び発掘調査の図面・写真などの記録及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

- 1 遺構の略記号は竪穴建物址－H、土坑－D、溝址－Mである。
- 2 挿図の縮尺は遺構1/80、遺物1/4を基本とする。これ以外ものは挿図中のスケールを参照されたい。
- 3 遺構の海拔標高は、遺構毎に統一し、水糸標高をスケール上に「標高」として記してある。また、土層の色調は1988年版「新版 標準土色帖」に基づいた。
- 4 遺物挿図番号・遺物写真番号・遺物観察表番号は一致する。
- 5 調査区グリットは公共座標の区割りにしたが、間隔は4m×4mで設定した。
- 6 遺構の計測値は下図に示した部分の測定値である。面積は床面積、壁残高は最大値である。
- 7 挿図中における網掛は以下の表現である。



目次

口絵

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 遺跡周辺の環境	1
1.遺跡の地理的環境	1
2.遺跡の歴史的環境	2
3.基本層序	3
第4節 検出遺構・遺物の概要	4
第Ⅱ章 遺構と遺物	4
第1節 住居址	4
H11号住居址	4
H12号住居址	4
H13号住居址	6
H14号住居址	9
H15号住居址	9
H16号住居址	11
H17号住居址	17
第2節 土抗	18
D2号土坑	18
D3号土坑	18
D4号土坑	20
第3節 溝址	20
M1・M7号溝址	20
第4節 遺構外出土遺物	20
第Ⅲ章 まとめ	22
写真図版	27
報告書抄録	
奥付	

挿図目次

第1図 松ノ木遺跡Ⅲの位置	2
第2図 周辺遺跡分布図	3
第3図 基本層序模式図	3
第4図 H11号住居址	5
第5図 H12号住居址(1)	7
第6図 H12号住居址(2)	8
第7図 H13号住居址	9
第8図 H14号住居址	10
第9図 H15号住居址(1)	12
第10図 H15号住居址(2)	13
第11図 H15号住居址(3)	14
第12図 H16号住居址(1)	15

第13図	H16号住居址（2）	16
第14図	H17号住居址	18
第15図	D 2号土坑	19
第16図	D 3号土坑	19
第17図	D 4号土坑	19
第18図	M 1・M 7号溝址	21
第19図	遺構外出土遺物	23
第20図	松ノ木遺跡Ⅲ全体図	24



M1近景（括れ部）

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 調査の経緯

平成10年6月1日、株式会社マルカワは松ノ木遺跡内に店舗を建設するため文化財保護法第57条の2第1項の規定に基づく届出を文化庁長官に行った。これを受け佐久市教育委員会は試掘調査を実施し、竪穴住居址6軒を検出した。保護協議の結果、遺跡の破壊が避けられないことが明らかとなったため、6月8日に埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し6月11日～7月9日の期間発掘調査を行った。また、同年12月14日～平成11年3月31日の期間整理作業を行った。

平成25年、市内遺跡発掘調査事業の一環として佐久市教育委員会は本書を刊行した。

第 2 節 調査体制

平成10年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教 育 長	依田英夫
事 務 局	社会教育課	教育次長	北 沢 馨
		課長(兼)管理係長	須江仁胤
		埋蔵文化財係長	荻原一馬
調 査 団	調査担当者	係	林 幸彦 三石宗一 須藤隆司
			小林真寿 羽毛田卓也 富沢一明
			上原 学
		調査担当者	林 幸彦
		調 査 主 任	佐々木宗昭

平成25年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教 育 長	土屋盛夫
事 務 局	社会教育部	部 長	矢野光宏
	文化財課	課 長	三石宗一
	文化財調査係	係 長	比田井清美
		係	須藤隆司、小林真寿、富沢一明、上原 学
		嘱 託 職 員	神津一明、久保浩一郎
		調 査 担 当 者	林 幸彦
		調 査 員	小林真寿
			磯貝律子、上原美代子、小島 真、副島充子
			中沢 登、中山清美、細谷秀子、柳沢亜矢子
			依田好行

第 3 節 遺跡周辺的环境

1 遺跡の地理的環境

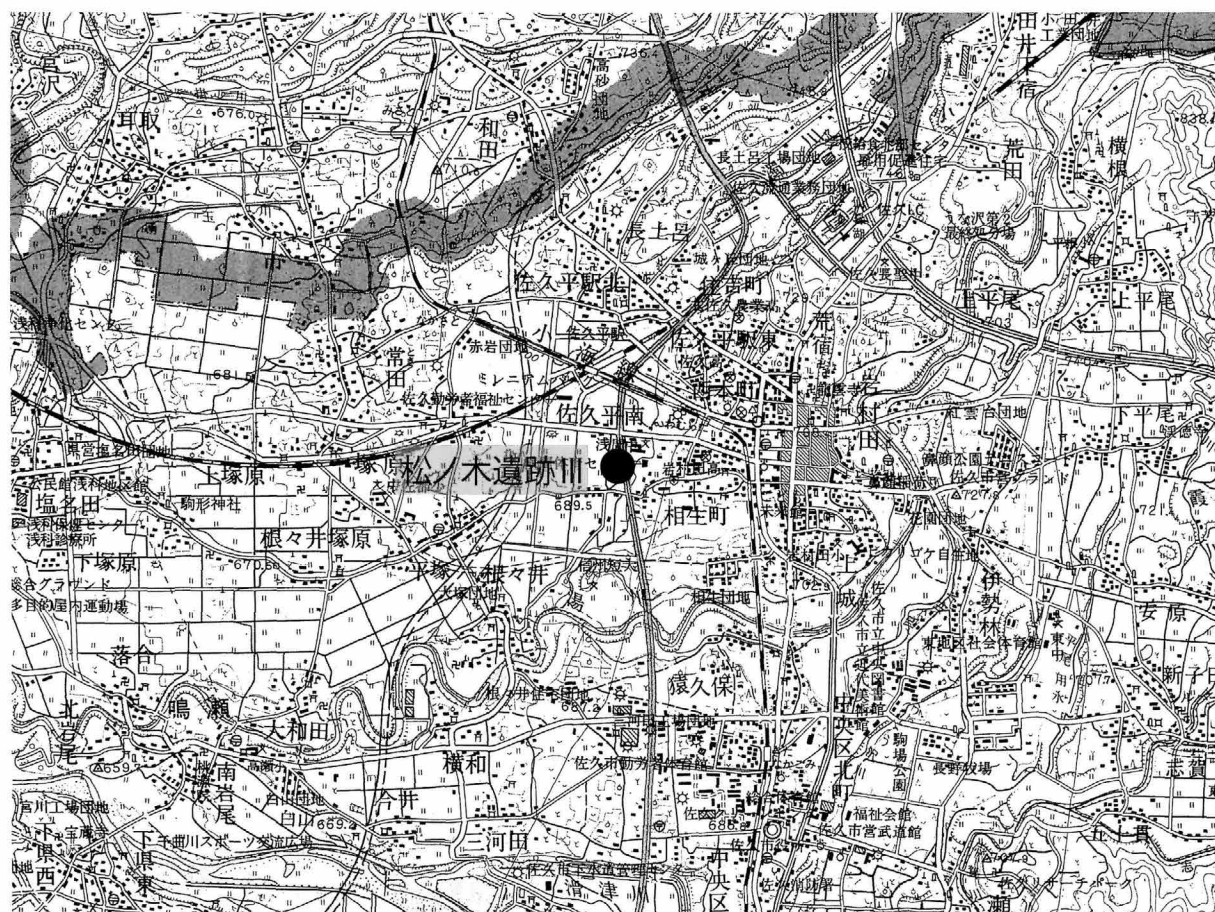
佐久市の中核をなす佐久平は、東方を関東山地北端の荒船山・兜岩山等で群馬県と境をなし、北方には浅間山がそびえ、南方には八ヶ岳・蓼科山が連なり、中央を千曲川が流れる。千曲川は甲武信岳に源を発し、太田部駅付近で北から南西に向きを変えつつ、雨川・滑津川・湯川・片貝川などの諸河川と合流しながら大きな沖積地を形成し、相浜付近で流れを北に転じ、上田・善光寺平へと向かう。

松ノ木遺跡は、国道141号線を中心に北端の浅間中学校から南に500mほどの不整形な範囲の遺跡である。標高は695mを測る。現状は、佐久地方北部の浅間山麓裾野に特有な田切り地形が消滅した平坦な地形であるが、表土下には塚原泥流の残丘地形が埋没しており、この残丘周辺の平坦面と北東から残丘に延びる微高地、それを取り巻く低地

が展開する複雑な地形が隠れている。松ノ木遺跡Ⅲも、調査対象地の南端の塚原泥流残丘から北東に延びる高さ約2m、幅30mの微高地上に営まれている。1996年に国道141号バイパス工事に先立ち調査された松ノ木遺跡Ⅰは、松ノ木遺跡Ⅲの東隣にあたり、同一の集落遺跡である。

2 遺跡の歴史的環境

松ノ木遺跡が存在する佐久市北部平地部分は、浅間火山の火山噴出物である「P1」・「P2」の堆積により形成されている。年代的には1万年を遡る時代のため、それ以前の地表は現地表面から20～30m下に埋没している。そのような理由もあり、遺跡周辺には旧石器時代の人々の痕跡は今のところ発見されていない。縄文時代の遺跡も周辺には存在しないが、断片的な資料が（遺構に伴わない少量の土器片や石器）散見されるようになる。この地域で人々の活動が活発になるのは弥生時代中期後半の「粟林式期」に入ってからである。松ノ木遺跡南方の西一本柳遺跡にはこの時期大規模な集落が出現し、後期に継続する。同様に北東の円正坊遺跡や、南西の西一里塚遺跡でも集落規模の大小はあるものの同様な展開が認められる。この地域が水稻耕作に適した低湿地に囲まれていたことがその要因のひとつと思われる。佐久平駅周辺や円正坊遺跡の調査では、弥生時代後期の遺構に地震によるものと思われる痕跡が発見されており、この時期に大規模な地震があったことが想定されている。（古墳時代との見解もある）古墳時代前期の遺跡は弥生時代から激減しており、この時期の集落遺跡である松ノ木遺跡は貴重な遺跡といえる。中期にはいと西一本柳遺跡・円正坊遺跡などで再び集落が出現し拡大していく。後期に入ると北西ノ久保遺跡に古墳群が形成され、各種の埴輪が出土している。この他にも遺跡周辺には単独の墳丘が存在し、古墳とされるものも存在するが塚原泥流の残丘との区別、あるいは残丘を利用した墳丘墓との識別は発掘調査を行って見なければ分らないのが実情であろう。奈良・平安時代、中世になっても西一本柳遺跡や円正坊遺跡では集落が連綿と営まれていく。円正坊遺跡では「園勝寺」・「円正坊」と思われる遺構が検出されている。



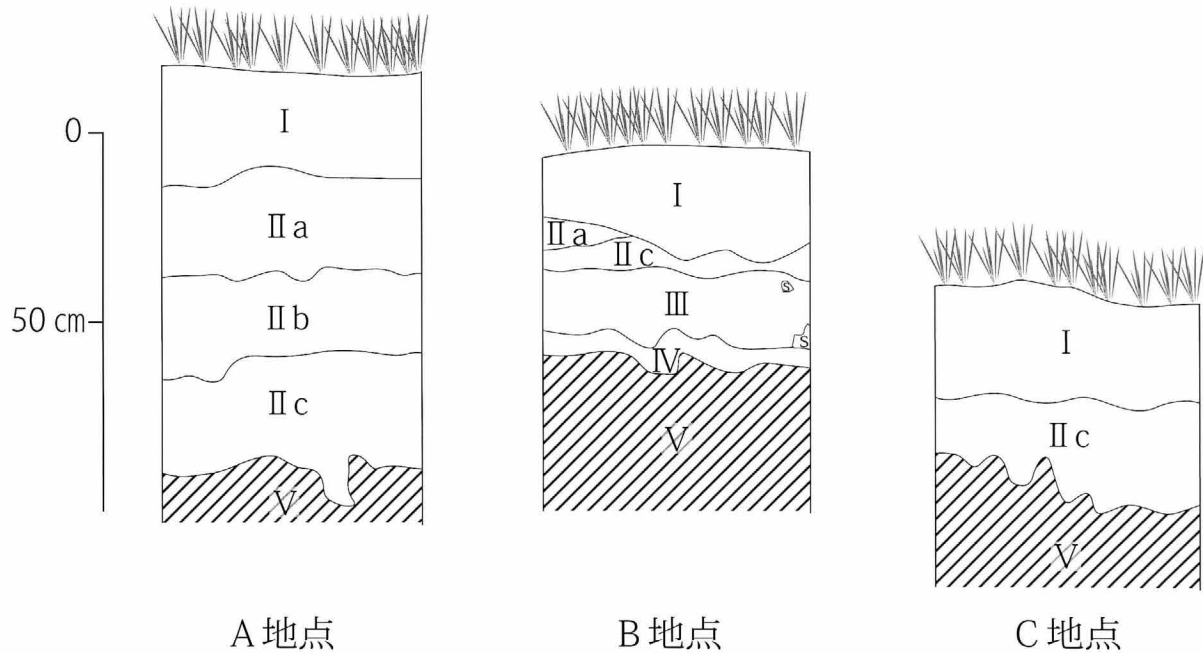
第1図 松ノ木遺跡Ⅲの位置



第2図 周辺遺跡分布図

3 基本層序

基本層序は第3図のとおりである。観察地点は全体図上にA・B・Cで記した3地点である。I層は耕作土である。この下に部分的に砂質土Ⅱa・Ⅱb層があり、遺構確認面であるⅡc層が調査区全面に堆積する。Ⅲ層は遺構覆土であり、P1の漸移層であるⅣ層が部分的に堆積し、地山Ⅴ層-P1が堆積している。



第3図 基本層序模式図

- I 耕作土 (10YR3/3)
- Ⅱa 褐色土層 (10YR4/4) 砂質土。
- Ⅱb にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 砂質土。
- Ⅱc 暗褐色土層 (10YR3/4) 粘質有、一部砂質、遺構確認面。

- Ⅲ 黒褐色土層（10YR2/2） 遺構覆土。
- Ⅳ 灰黄褐色土層（10YR4/2） P1漸移層。
- Ⅴ 黄褐色土層（10YR5/6） P1。

第4節 検出遺構・遺物の概要

検出された遺構・遺物の概要は以下のとおりである。

- 遺構 竪穴住居址－7棟、土坑－3基、溝址－2条
- 遺物 弥生土器、土師器、石器・石製品

第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 住居址

●H11号住居址（第4図）

え3グリットで検出された。H15号住居址を切る。N-10° -Wに長軸方位をとり、長軸長5.0m、短軸長5.0m、壁残高0.24m、面積28.11㎡の規模で、平行四辺形の平面である。P1～P4の4基が支柱穴であり、ほぼ均等に配置されている。柱径はφ14cm前後である。周溝は認められない。P1の南西方向1mに位置するP7は炉と思われるが、焼土は認められなかった。南東隅の壁下に位置するP6は貯蔵穴であろう。このP6を含めた東辺の壁下には焼土が広がっていたが、性格は不明である。

遺物は弥生土器と土師器が出土している。弥生土器－5の高坏脚と6の壺は後期箱清水式期のもので、本址と重複するH15号住居址に本来帰属する遺物と思われる。土師器には高坏（1）、甕（2・3）、台付甕（4）の器種が認められる。高坏1は坏部分の破片である。暗文状のヘラミガキが内外面に施されている。体部中位で鈍い稜をなし、口縁部が緩く外反するようである。甕2は内面にはハケ目がわずかに認められるが、外面には一切認められない。ヘラケズリ後、ナデ調整が行われている。特徴的なのは、口縁部外面に加えられているヘラケズリ調整であり、北陸系の甕を意識したものともとれる。甕3は所謂「ハケ調整くの字甕」である。ヘラミガキ調整は施されない。内面は口縁から頸部下まで、外面は口縁端部以外にハケ目調整が施されている。内面のその他の部分にはヘラナデ、外面口縁端部はヘラケズリ後ナデ調整が加えられている。4は台付甕の台部分の破片である。内外面にハケ目調整が施される。

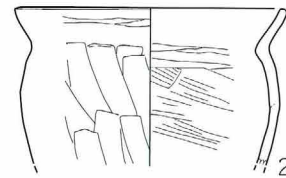
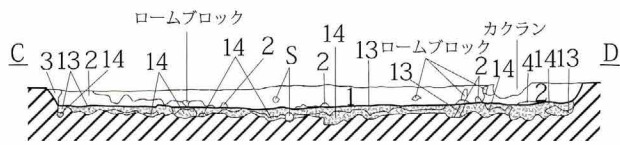
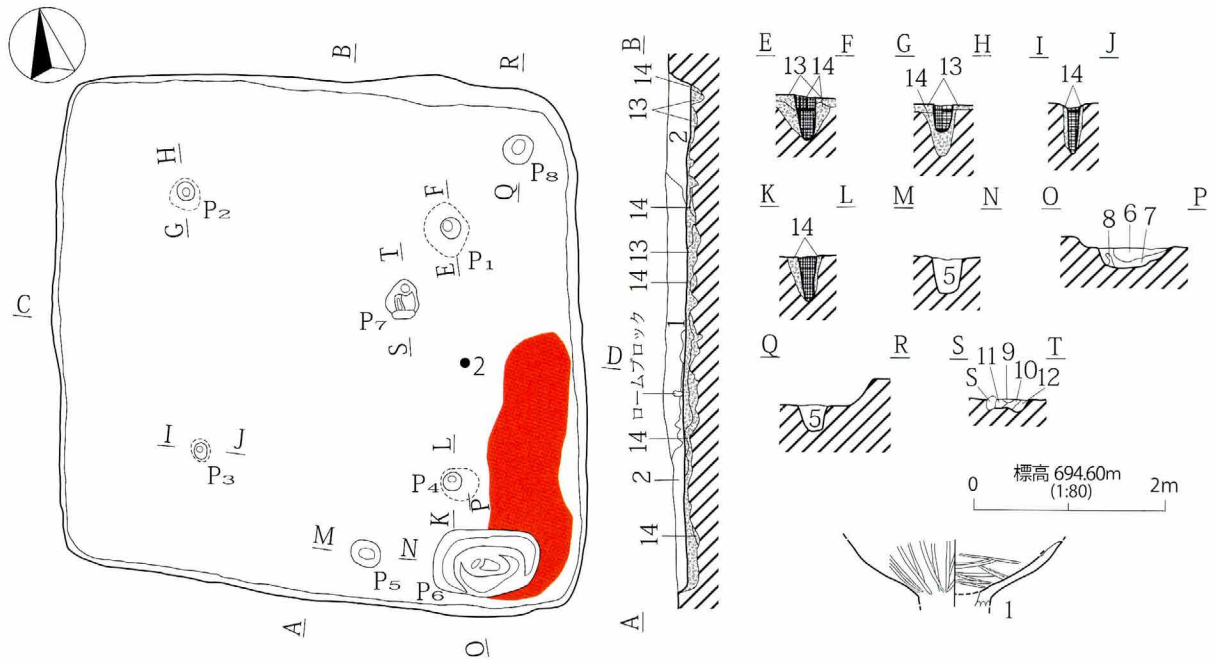
以上の出土遺物の特徴から、本址は古墳時代前期の所産と考えられる。

第1表 H11号住居址出土遺物観察表

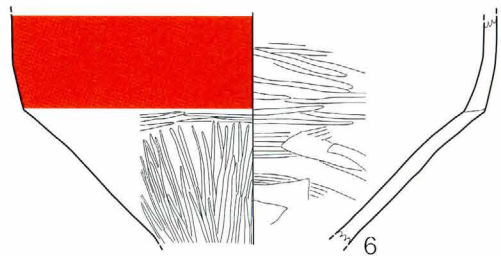
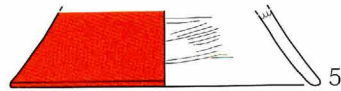
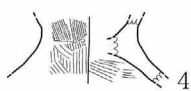
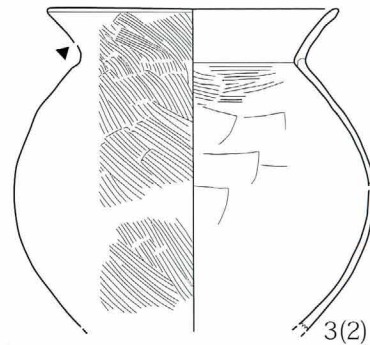
No	器種	器形	法 量			成 形・調 整		備 考	出土層位
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面		
1	土師器	高坏	—	—	<3.5>	暗文状ヘラミガキ	暗文状ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区2層
2	土師器	甕	(14.4)	—	<8.3>	ハケ目、ヘラケズリ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ	回転実測	Ⅲ区2層
3	土師器	甕	(15.4)	—	<17.1>	ハケ目、ヘラナデ	ハケ目、ヘラケズリ、ナデ	完全実測	No2・Ⅰ区2層
4	土師器	台付甕	—	—	<3.6>	ハケ目	ハケ目	回転実測	Ⅱ区ホリ
5	弥生土器	高坏	—	(16.4)	<4.1>	ハケ目、ナデ	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅰ区2層
6	弥生土器	壺	—	—	<12.2>	ハケ目、ヘラミガキ、ナデ	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅲ区ホリ

●H12号住居址（第5・6図）

か6グリットで検出された。H13号住居址に切られ、H16号住居址を切る。N-97° -Wに長軸方位をとる。長軸長5.6m、短軸長4.28m、壁残高0.36m、面積26.64㎡の規模で、平行四辺形の平面である。P1～P4の4基が支柱穴であり、ほぼ均等に配置されている。柱径はφ16～20cmである。周溝は認められない。P2の東南2mに地焼炉が検出されている。南西隅壁下の1.5m東寄りには貯蔵穴と思われるP6が検出されている。P7は出入口関連の施設であろう。堀方及びP5の存在から、本址は建替えが行われていることが推測されるが、竪穴の規模は変化していない。



1. 黒色土層 (10YR2/1)。
 2. 黒褐色土層 (10YR2/3) 10YR5/6 の小ブロック多含・炭少含。
 3. 黄褐色土層 (10YR5/8)。
 4. 褐色土層 (7.5YR4/4) 灰炭・焼土。
 5. 黒褐色土層 (10YR2/3) 10YR5/8 の大ブロック少含。
 6. 暗褐色土層 (10YR3/4)。
 7. 褐色土層 (7.5YR4/6) 焼土と炭。
 8. 褐色土層 (7.5YR4/4) 10YR5/8 の小ブロック多含。
 9. 黒褐色土層 (10YR2/2)。
 10. 黒褐色土層 (10YR2/3)。
 11. 黒褐色土層 (10YR2/2) 10YR5/8 小ブロック多含。
 12. 黒褐色土層 (10YR2/2) 炭少含。
 13. 黒褐色土層 (10YR2/2) 貼床 10YR5/8 小ブロック含。
 14. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR5/8 小ブロック多含。
- 焼土。
 ▨ 柱痕。



第4図 H11号住居址

出土遺物は弥生土器、土師器、土製品、石器、鉄器が認められる。弥生土器には鉢 (14・15)、高坏 (16・17)、甕 (18～22)、壺 (23～27) の器種がある。全て箱清水式の範疇に収まるものと思われる。土師器には高坏 (1～9)、台付甕 (10・11)、壺 (12・13) の器種がある。高坏の脚は大きく「ハ」字に広がる1や8と、「ハ」字に直線的に

広がるもの(2・4~7)に大別できる。双方共に円孔の透かしを有する。坏部の形態も1のように下端できつい稜をなし、内湾しながら直線的に立ち上がるものと、2のように下端で鈍い稜をなし内湾しながら大きく開くものがある。調整も1と2では明瞭に異なっており、1が脚内以外のハケ目を縦位の暗文状のヘラミガキで全て消すのに対し、2はハケ目を残し、坏部の内面には横位のヘラミガキを加えている。また、1・5の脚端部のヘラケズリにより面取りされた形態は弥生土器には認められない手法である。台付甕は2点共に台部分のみが出土している。10は内外面ハケ目調整で、脚端部に向かい内湾する形態である。11は外面ナデ、内面ハケ目調整で、直線的に開く形態である。壺12は有段口縁の形態で、外面段部の稜線をヘラケズリ調整を施し鋭く作り出している。口唇部の面取りもシャープである。13は外来系の壺の口縁部片である。外面には櫛描の横線文、内面口唇直下には棒状工具による横位沈線が1条巡る、外面と内面口唇部までは赤彩が施される。土製品は土器片円板(28・29)と紡錘車(30)が出土した。28・29は同一の土器片から作られている可能性が強いが、29は把手状の部分の有しており、かなり特異な形態の土器である。紡錘車は土器片を利用したものではなく、紡錘車として作られ焼成されたものである。石器は31の黒曜石製の石鏃と32の磨・敲石が出土した。鉄器は33の鏃が1点出土した。

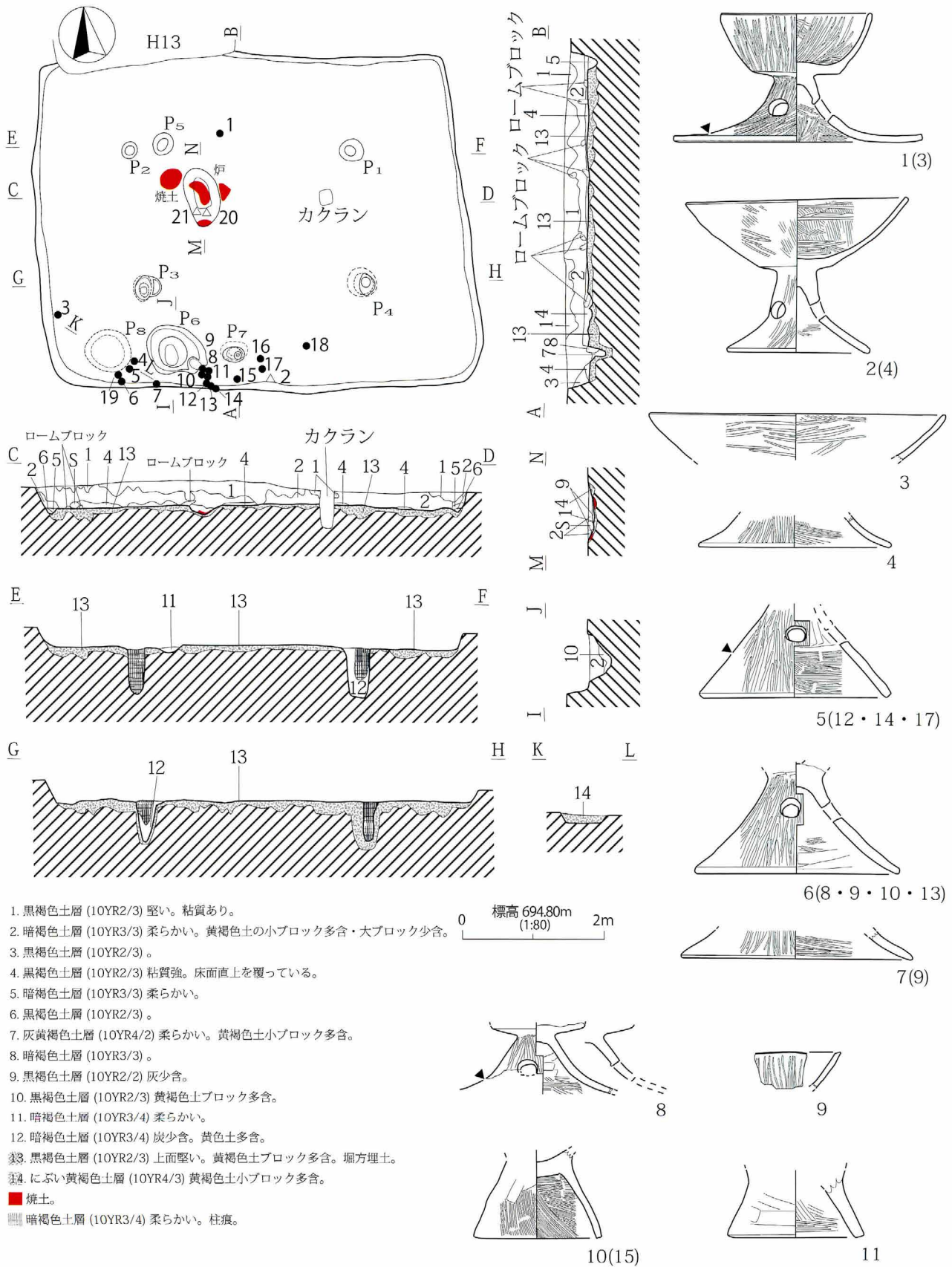
以上の出土遺物の特徴から、本址は古墳時代前期の所産と考えられる。

第2表 H12号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量			成 形・調 整		備 考	出土層位
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面		
1	土師器	高坏	10.7	17.6	9.2	ハケ目、ヘラミガキ	ハケ目、ヘラミガキ	完全実測	No 3
2	土師器	高坏	15.8	10.2	11.0	ハケ目、ヘラミガキ	ハケ目、ヘラミガキ	完全実測	No 4
3	土師器	高坏?	(21.0)	—	<3.3>	ハケ目、ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区1層
4	土師器	高坏	—	(13.6)	<2.3>	ハケ目	ヘラミガキ	回転実測	Ⅱ区ホリ
5	土師器	高坏	—	13.6	<6.7>	ハケ目、ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実測	No12・14・17
6	土師器	高坏	—	14.6	<7.9>	ハケ目、ヘラナデ	ヘラケズリ、ヘラミガキ	完全実測	No8~10・13
7	土師器	高坏	—	(16.4)	<2.0>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	No 9
8	土師器	高坏	—	—	<5.1>	ハケ目、ヘラナデ	ハケ目、ヘラミガキ	完全実測	Ⅲ区床
9	土師器	高坏?	—	—	—	ヘラミガキ	ヘラミガキ	破片実測	Ⅰ区床
10	土師器	台付甕	—	9.1	<6.4>	ハケ目、ヘラナデ	ハケ目、ヘラナデ	完全実測	No15
11	土師器	台付甕	—	(9.8)	<4.9>	ハケ目	ヘラナデ	回転実測	覆土
12	土師器	壺	(22.6)	—	<3.5>	ハケ目、ヘラミガキ	ハケ目、ヘラミガキ	回転実測	No 5
13	土師器	壺	—	—	—	一条の平行沈線、口唇赤彩	赤彩、櫛描横線文	破片実測・拓本	Ⅲ区1層
14	弥生土器	鉢?	(16.0)	—	<5.6>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅱ区1層
15	弥生土器	鉢	—	(4.6)	<1.9>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅲ区サトル
16	弥生土器	高坏	—	—	<4.0>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	完全実測	Ⅳ区
17	弥生土器	高坏	—	—	<5.6>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	完全実測	No18
18	弥生土器	甕	(17.8)	—	<9.4>	ヘラミガキ	櫛描波状文	回転実測	No16
19	弥生土器	甕	—	(8.0)	<2.7>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅲ区床
20	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描斜走文	破片実測・拓本	Ⅳ区床
21	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文	破片実測・拓本	覆土
22	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文	破片実測・拓本	Ⅱ区1層
23	弥生土器	壺	(18.6)	—	<2.5>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅲ区1層
24	弥生土器	壺	(21.0)	—	<6.2>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅰ区床
25	弥生土器	壺	(29.0)	—	<2.7>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅳ区床
26	弥生土器	壺	(30.0)	—	<2.0>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	覆土
27	弥生土器	壺	—	—	—	ヘラミガキ、赤彩	櫛描波状文、赤彩	破片実測・拓本	Ⅲ区サトル
28	土製品	円板	4.3	6.5	1.1	ヘラナデ、ヘラミガキ	ヘラナデ、ヘラミガキ	完全実測・拓本	No19
29	土製品	円板	6.4	7.7	3.7	ヘラナデ、ヘラミガキ	ヘラナデ、ヘラミガキ	完全実測	No 6
30	土製品	紡錘車	4.0	3.8	0.9	重量16.8、ナデ・ミガキ、孔径0.6		完全実測	No 1
31	石器	石鏃	<1.3>	<1.4>	0.2	重量<0.27>、黒曜石、先端・左脚欠損		完全実測	覆土
32	石器	磨・敲石	15.2	9.3	7.5	重量1468.13、左側に平坦な磨面、上下端に敲打痕		完全実測	No 2
33	鉄器	鏃	<3.8>	1.1	<0.3>	重量<2.0>、頸部欠損		完全実測	Ⅱ区床

●H13号住居址(第7図)

か5グリットで検出された。H12号・H15号住居址を切り、N-96°-Wに長軸方位をとる。長軸長2.24m、

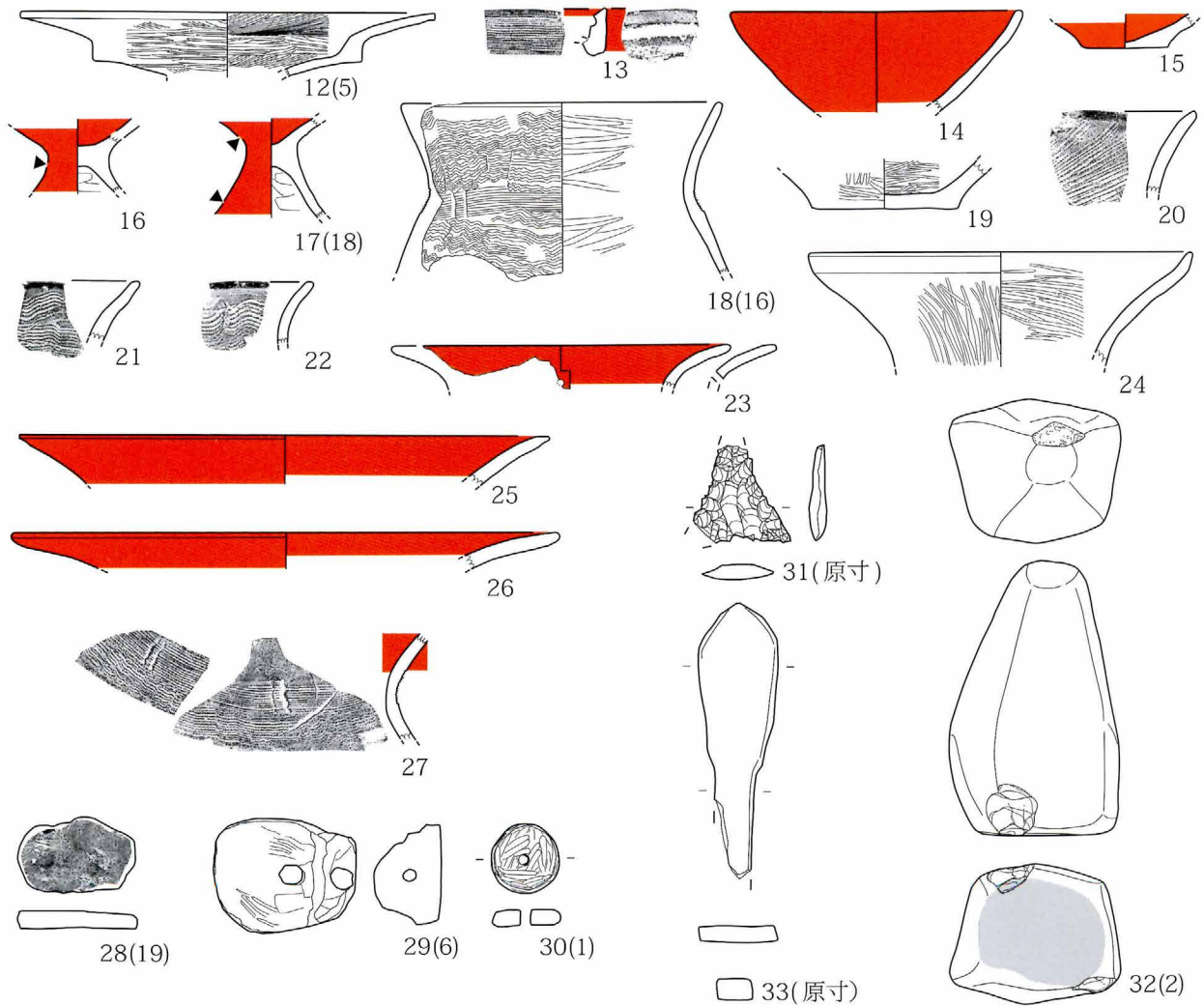


第3表 H 13号住居址出土遺物観察表

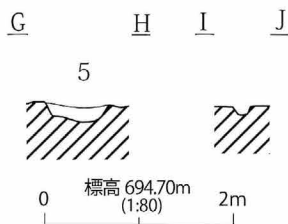
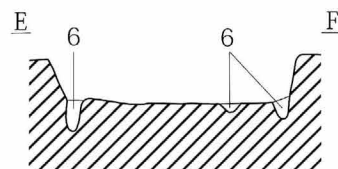
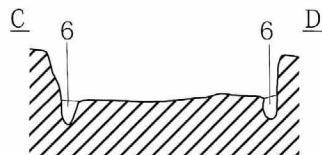
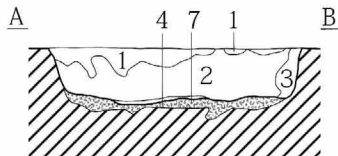
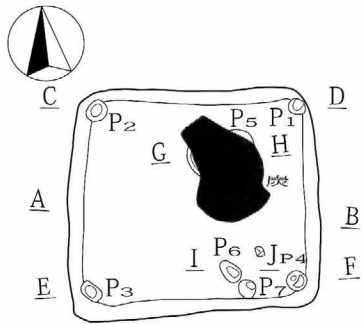
No	器種	器形	法 量			成 形・調 整		備 考	出土層位
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面		
1	弥生土器	鉢	—	—	—	赤彩	赤彩	破片実測・拓本	覆土
2	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描斜走文	破片実測・拓本	覆土
3	須恵器	甕	—	—	—	ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	覆土
4	鉄器	不明	<1.9>	<0.7>	<0.5>	重量<0.87>、下部欠損		完全実測	覆土
5	鉄器	不明	<2.4>	<1.6>	<0.3>	重量<0.99>、左上欠損		完全実測	床

第4表 H 14号住居址出土遺物観察表

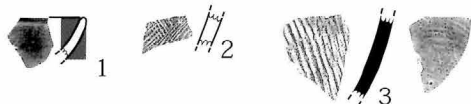
No	器種	器形	法 量			成 形・調 整		備 考	出土層位
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面		
1	弥生土器	高坏	—	—	<4.6>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	ベルト
2	弥生土器	甕	(21.2)	—	<16.5>	ヘラミガキ	櫛描波状文	回転実測	No2~5
3	弥生土器	甕	—	6.1	<7.1>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	No1、床
4	弥生土器	台付甕	—	7.6	<3.4>	ナデ	ヘラミガキ	完全実測	床
5	弥生土器	台付甕	—	—	<8.9>	ヘラミガキ	櫛描波状文	回転実測・拓本	No6
6	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文	破片実測・拓本	覆土
7	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文	破片実測・拓本	覆土
8	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文	破片実測・拓本	No6
9	土製品	土器片円板	6.2	7.8	1.0	ハケ目	ヘラミガキ、赤彩	完全実測・拓本	覆土



第6図 H12号住居址 (2)



1. 黒褐色土層 (10YR2/2)。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 黒褐色土ブロック多含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土ブロック多含。
4. 暗褐色土層 (10YR2/2) 炭化材多含。
5. 黒褐色土層 (10YR2/3) 炭多含。黄褐色土多含。
6. 暗褐色土層 (10YR3/3) 黄褐色土の小ブロック多含。
7. 褐色土層 (10YR2/2) 黄褐色・黒褐色土の小ブロック多含・堀方埋土。



第7図 H13号住居址

遺物は弥生土器、土師器、石器が出土した。弥生土器には鉢（1～5）、高坏（6～8）、甕（9～16）、壺（17～22）の器種が認められる。鉢は内外面赤彩、高坏も脚内以外は赤彩が施される。高坏の坏部は体部に稜を持って直立気味に立ち上がり、口縁部で強く外反する形態である。甕は頸部に櫛描波状文が巡り、口縁部及び体部上半には櫛描の波状文が斜走文が施される。壺には無頸壺（17）と有頸壺がある。基本的に外面及び内面の口縁部は赤彩が

短軸長2.0m、壁残高0.52m、面積4.88㎡の規模で、長方形の平面形である。4隅の壁下に均等配置されたP1～P4の4基が支柱穴である。柱痕は確認できなかった。周溝は認められない。P6・P7が位置する東南隅が出入口と思われる。P1の南西1mに位置するP5及びその周辺には炭化物の散乱が著しいが、焼土は認められない。カマドや炉は存在しないため、住居ではない可能性も高い。

出土遺物はほとんどない。図示した3点の遺物も細片である。（1）は内外面赤彩の弥生の鉢口縁部片である。（2）は櫛描斜走文が施される弥生の甕体部片、（3）は須恵器甕の体部片、（4・5）は器種不明の鉄器片である。

遺構の重複関係から、古墳時代前期以降であることは確かである。

●H14号住居址（第8図）

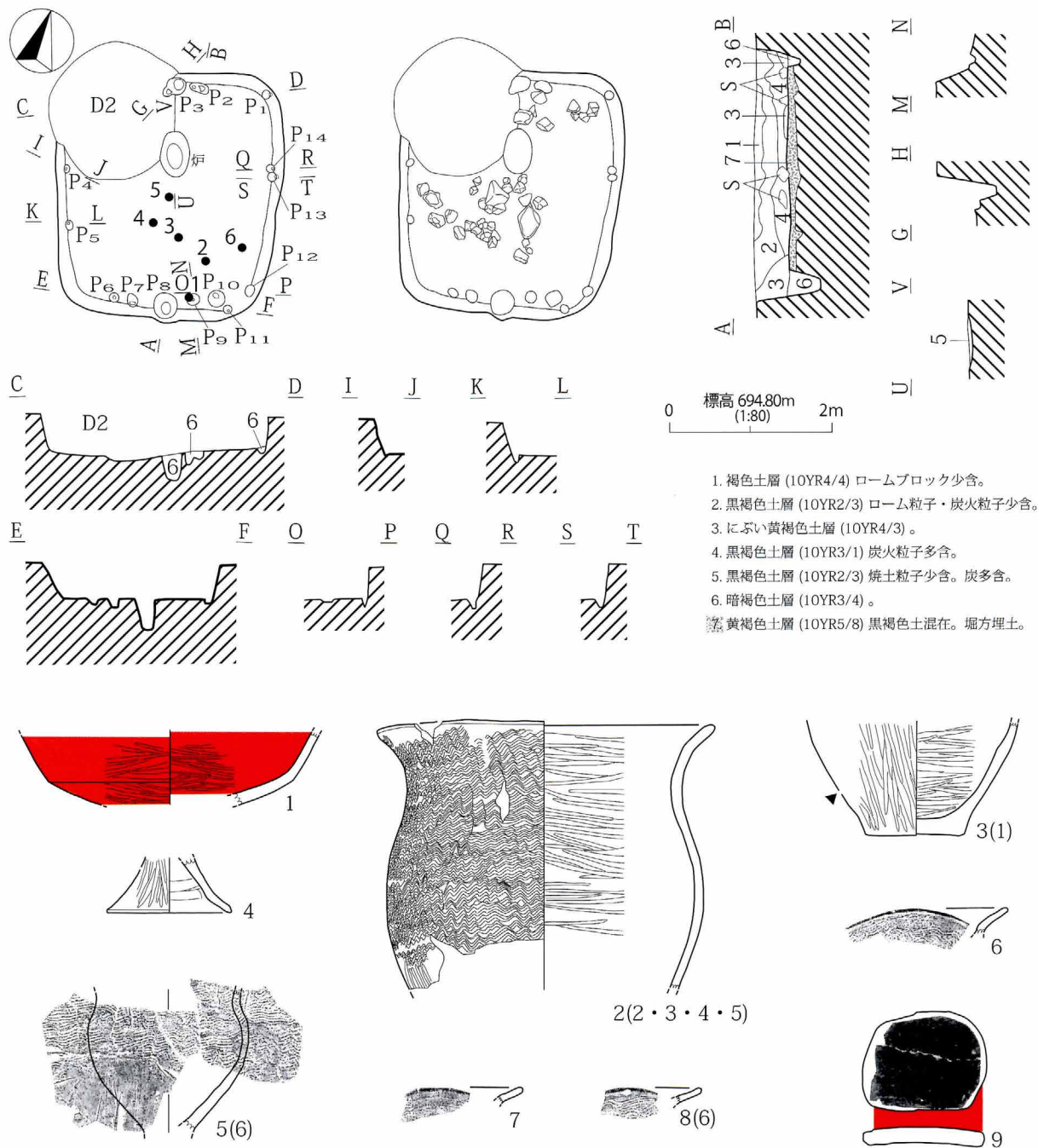
か4グリットで検出された。D2号土坑に切られる、N-15°-Eに長軸方位をとる。長軸長2.52m、短軸長2.1m、壁残高0.44m、面積6.752㎡の規模で、台形の平面である。壁下に巡らされたP1～P14の14基のピットで上屋を支える構造である。長軸線上のP3とP8の2基は棟持柱と思われる。周溝は持たない。炉は地焼炉で、住居中央から北に50cm程の位置に構築される。床面上に堆積した4層内には多量の礫が包含されていた。本址の構築材か、埋没過程の本址が形成した窪地に廃棄された塵と思われる。

遺物は弥生土器と土製品が出土している。弥生土器には高坏（1）、甕（2・3・6・7・8）、台付甕（4・5）、の器種が認められる。高坏1は坏体部に稜を有するもので、内外面に赤彩が施される。甕・台付甕は全て櫛描波状文が施される。8は5と同一個体の可能性を有する。土製品は（9）の赤彩壺の体部片を利用した土器片円板が認められる。

以上の出土遺物の特徴から、本址は弥生時代後期の所産と考えられる。しかし、住居址形態・遺跡全体の時期傾向からは古墳時代前期の可能性も高い。

●H15号住居址（第9・10・11図）

お4・5グリットで検出された。H11号・H13号住居址に切られる、N-15°-Wに長軸方位をとる。長軸長6.56m、短軸長5.52m、壁残高0.44m、面積42.70㎡の規模で長方形の平面である。長方形に均等配置されるP1～P4の4基のピットが支柱穴である。壁下にはP8～P15の10基の壁柱穴が規則的に巡らされている。炉はP1とP2の中間ややP2寄りに地焼炉が構築されている。周溝は有さない。P4からP7の東側には所謂「間仕切」が存在する。P3の北に存在するP6～P15間からは土器が集中して出土している。



第8図 H14号住居址

施される。有頸の壺は体部下半に稜を持ち、この稜付近を境に下は無彩が普通であるが、19は外面全面に赤彩が施される。口縁部の形状は19・22のように受口のもの、19のような素口縁のものがあ、受口口縁には櫛描波状文が1条巡る。頸部が残存するものは19だけであるが、櫛描「T」字文が施文されている。土師器には高坏（23・24）、器台（25）、手捏（26）、甕（27・28・33）、台付甕（29～31）、瓢壺（34）の器種が認められる。高坏は脚部が残存しないため形状が不明であるが、坏部は23のような半球状の稜を持たないものと、24のように稜を有するものがある。いずれも赤彩は施されない。器台は脚部に円孔を有し、短めに「ハ」字に開く。受け部分は残存しないため形状は不明である。赤彩は認められない。手捏は小型の鉢の可能性も有する。無彩である。甕は所謂「ハケ調整く字甕」の27・33と、口縁部を肥厚させる28のような形態のものが存在する。台付甕は口縁部形態は不明である。

第5表 H 15号住居址出土遺物観察表

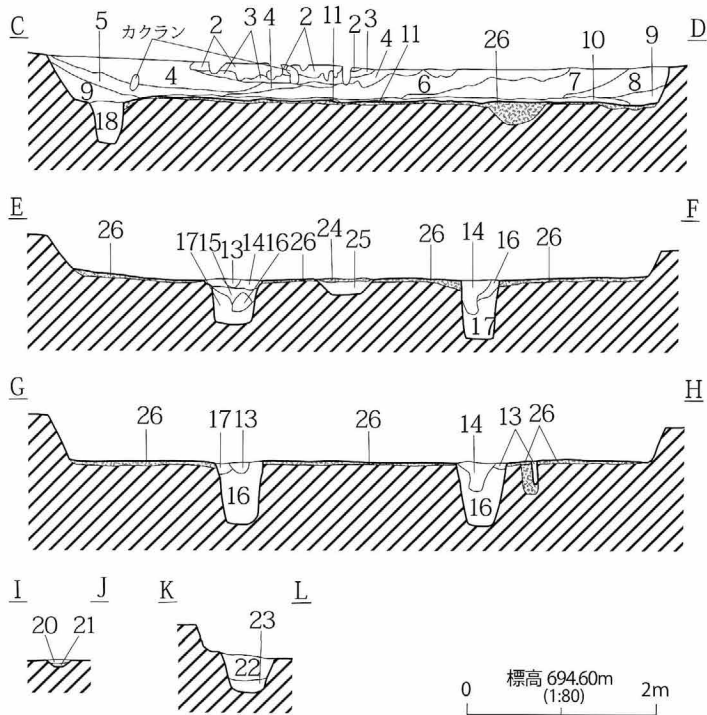
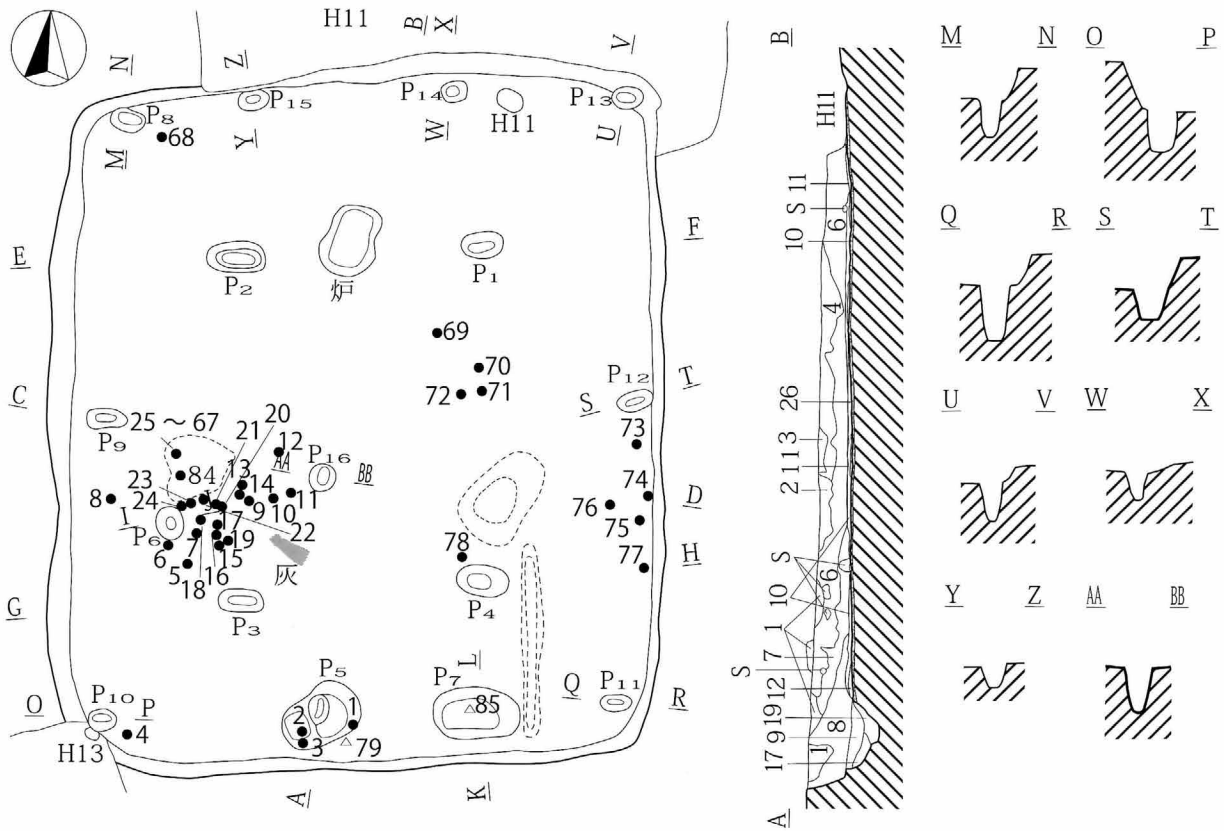
No	器種	器形	法 量			成 形・調 整		備 考	出土層位
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面		
1	弥生土器	鉢	11.8	4.3	5.5	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	完全実測	No77
2	弥生土器	鉢	(16.2)	4.2	6.0	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	完全実測	I区東
3	弥生土器	鉢	(19.2)	—	<6.4>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	No68、Ⅲ区
4	弥生土器	鉢	—	3.4	<3.0>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	完全実測	Ⅳ区
5	弥生土器	鉢	—	4.5	<1.9>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	完全実測	Ⅳ区床
6	弥生土器	高坏	(25.6)	—	<5.2>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅱ区床
7	弥生土器	高坏	(31.2)	—	<5.9>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	No4
8	弥生土器	高坏	—	(11.6)	<4.5>	ハケ目	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	I・Ⅳ区
9	弥生土器	甕	(29.0)	—	<22.0>	ヘラミガキ	櫛描波状文	回転実測	No17・19・14・25
10	弥生土器	甕	—	—	<17.4>	ヘラミガキ	櫛描波状文	回転実測	No73・74・76
11	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文	破片実測	Ⅲ区
12	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文	破片実測	I区ホリ、H16Ⅱ区
13	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文	破片実測	Ⅳ区
14	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描斜走文	破片実測	Ⅱ区
15	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描斜走文	破片実測	Ⅳ区
16	弥生土器	無頸壺	(7.4)	(6.6)	(15.0)	ヘラミガキ	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	I区ホリ、Ⅱ区床、P1
17	弥生土器	壺	(19.0)	—	<4.02>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	No2・3
18	弥生土器	壺	—	(7.6)	<7.1>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	No8、Ⅲ区
19	弥生土器	壺	(22.1)	9.1	39.7	ハケ目、ヘラミガキ	ヘラミガキ、赤彩	完全実測	No11・18・20・24
20	弥生土器	壺	—	(8.4)	<8.6>	ハケ目	ハケ目、ヘラミガキ	回転実測	No5、P7
21	弥生土器	壺	—	—	<18.6>	ハケ目	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	No23・75
22	弥生土器	壺	—	—	—	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	破片実測	Ⅲ区
23	土師器	高坏	(14.0)	—	<5.3>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	Ⅳ区1層
24	土師器	高坏	—	—	<3.2>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	No15、Ⅲ区
25	土師器	器台	—	(10.0)	<5.4>	ハケ目	ヘラケズリ、ヘラミガキ	回転実測	I・Ⅲ・Ⅳ区床
26	土師器	手捏or鉢	(8.0)	(4.6)	4.1	ヘラナデ	ヘラナデ	回転実測	Ⅲ区4層
27	土師器	甕	(16.4)	—	<4.0>	ハケ目	ハケ目	回転実測	Ⅲ・Ⅳ区
28	土師器	甕	(17.2)	—	<4.8>	ナデ	ナデ	回転実測	Ⅲ区
29	土師器	台付甕	—	8.3	<5.3>	ハケ目	ハケ目	完全実測	Ⅲ区、Ⅳ区1層
30	土師器	台付甕	—	8.7	<14.7>	ハケ目、ヘラナデ	ハケ目	完全実測	No57・84、Ⅱ区床
31	土師器	台付甕	—	9.9	<8.6>	ヘラケズリ、ハケ目	ハケ目、ヘラミガキ	完全実測	No9
32	土師器	台付甕	—	(9.4)	<5.7>	ハケ目	ハケ目	完全実測	No12
33	土師器	甕	—	—	<8.0>	ハケ目	ハケ目	回転実測	No78、Ⅲ区1層
34	土師器	瓢壺	—	—	<6.8>	ヘラミガキ	櫛描文	回転実測	Ⅳ区、M1
35	土製品	土器片円板	3.8	4.4	0.8	ハケ目	ハケ目	完全実測	Ⅲ区
36	石器	砥石	12.3	9.0	3.9	重量582.11g、砥面数5、条痕、敲打痕		完全実測	No85
37	石器	石鏃	<1.9>	<1.4>	0.4	重量0.80g、チャート、右脚欠損		完全実測	覆土
38	石器	石鏃	<3.1>	2.0	0.4	重量2.23g、黒曜石、茎部欠損		完全実測	P1
39	石器	磨石	14.7	9.5	7.8	重量1,244.11g、下側に顕著な磨面		完全実測	No79

30・31 は台は内湾せずに直線的に開く形態で、端部の折り返しも認められない。29・32 は若干ではあるが内湾気味である。32 は欠損後、上部に人為的な穿孔を行い、再利用した痕跡が認められる。瓢壺は口縁下部の破片であるが、櫛描文が施文されている。外来系（東海）であるが、搬入品か否かは判断できない。土製品は 35 の土器片円板が 1 点認められる。土師器「ハケ調整く字甕」の体部片を再利用して作られている。石器は 37・38 の打製石鏃、36 の砥石、39 の磨石が出土している。

以上の出土遺物の特徴から、本址は古墳時代前期の所産と考えられる。

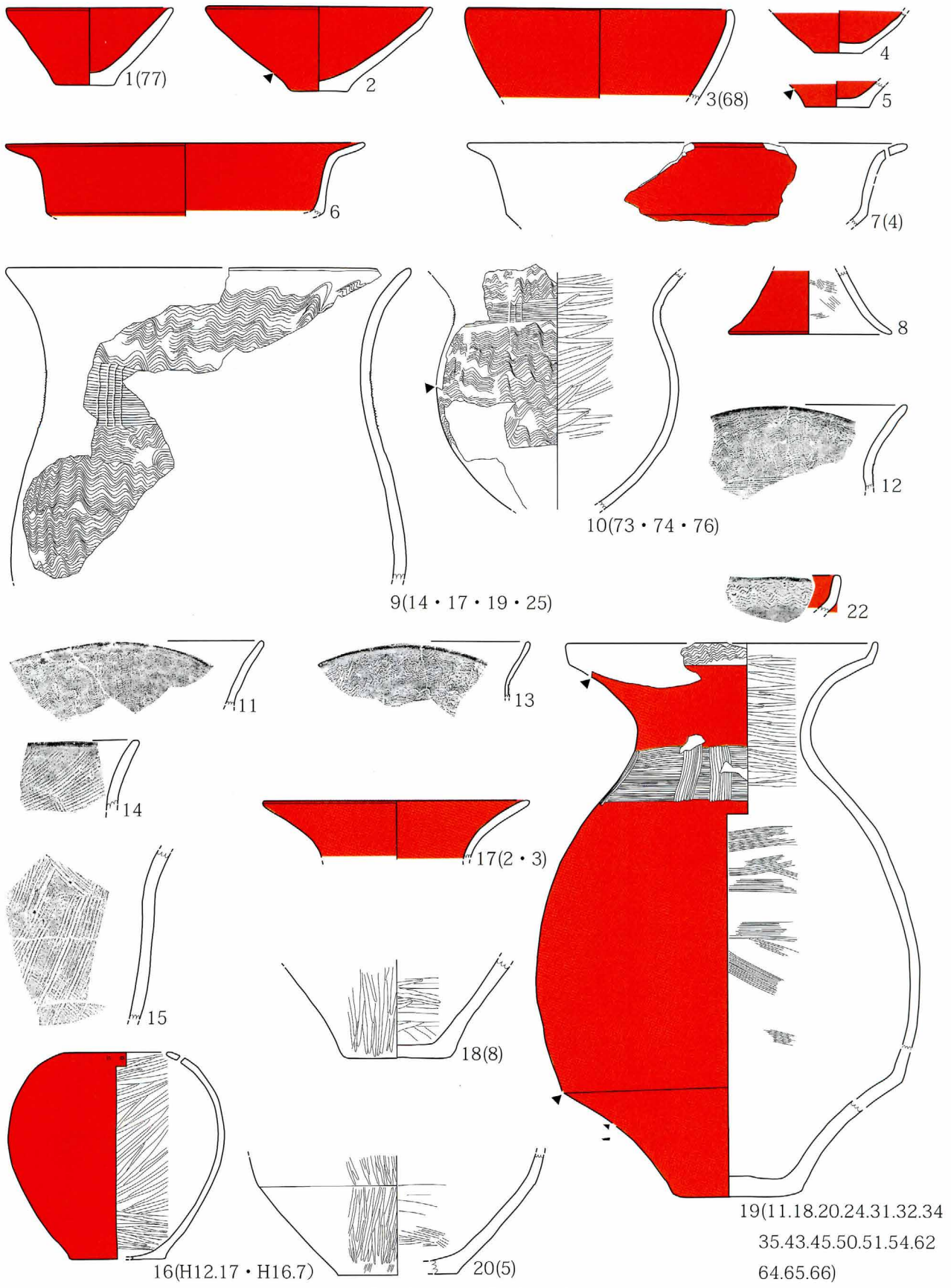
●H16号住居址 (第12・13図)

お7グリッドで検出された。H12号住居址に切られる、N-97°-Wに長軸方位をとる。長軸長4.16m、短軸長3.6m、壁残高0.56m、面積16.70㎡の規模で長方形の平面である。長方形に均等配置されるP1~P4の4基のピット



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) かたい。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) 10YR5/8 小ブロック多含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/3) 下部に帯状の炭・粘質強。
4. 暗褐色土層 (10YR3/3) 10YR5/8・10YR2/3 小ブロック多含。
5. 黒褐色土層 (10YR2/3) 粘質強・炭ブロック少含。
6. 黒褐色土層 (10YR2/2) 炭小含。
7. 暗褐色土層 (10YR3/4) 下部に帯状の炭 10YR5/8 ブロック多含。
8. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR2/2 の帯状ブロック含。
9. 暗褐色土層 (10YR3/3)。
10. 黒褐色土層 (10YR2/2)。
11. 灰白色土層 (10YR7/1) 炭。
12. 暗褐色土層 (10YR3/3) かたい。
13. 黒褐色土層 (10YR2/3)。
14. 暗褐色土層 (10YR3/4)。
15. 褐色土層 (10YR4/6)。
16. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。
17. にぶい黄褐色土層 (10YR5/4) 10YR3/3 小ブロック含。
18. 暗褐色土層 (10YR3/4) 10YR5/8 小ブロック多含。
19. 明黄褐色土層 (10YR6/6) 地山の土多含。
20. 黒褐色土層 (10YR2/3)。
21. 黒色土層 (10YR2/1) 炭多含。
22. 暗褐色土層 (10YR3/3) 10YR2/2・10YR5/8 小ブロック多含。
23. 黒褐色土層 (10YR2/2)。
24. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。
25. 黒褐色土層 (10YR2/3) 灰多含・灰小含。
26. 黒褐色土層 (10YR2/3) 10YR5/8 のブロック多含。床下の埋土。

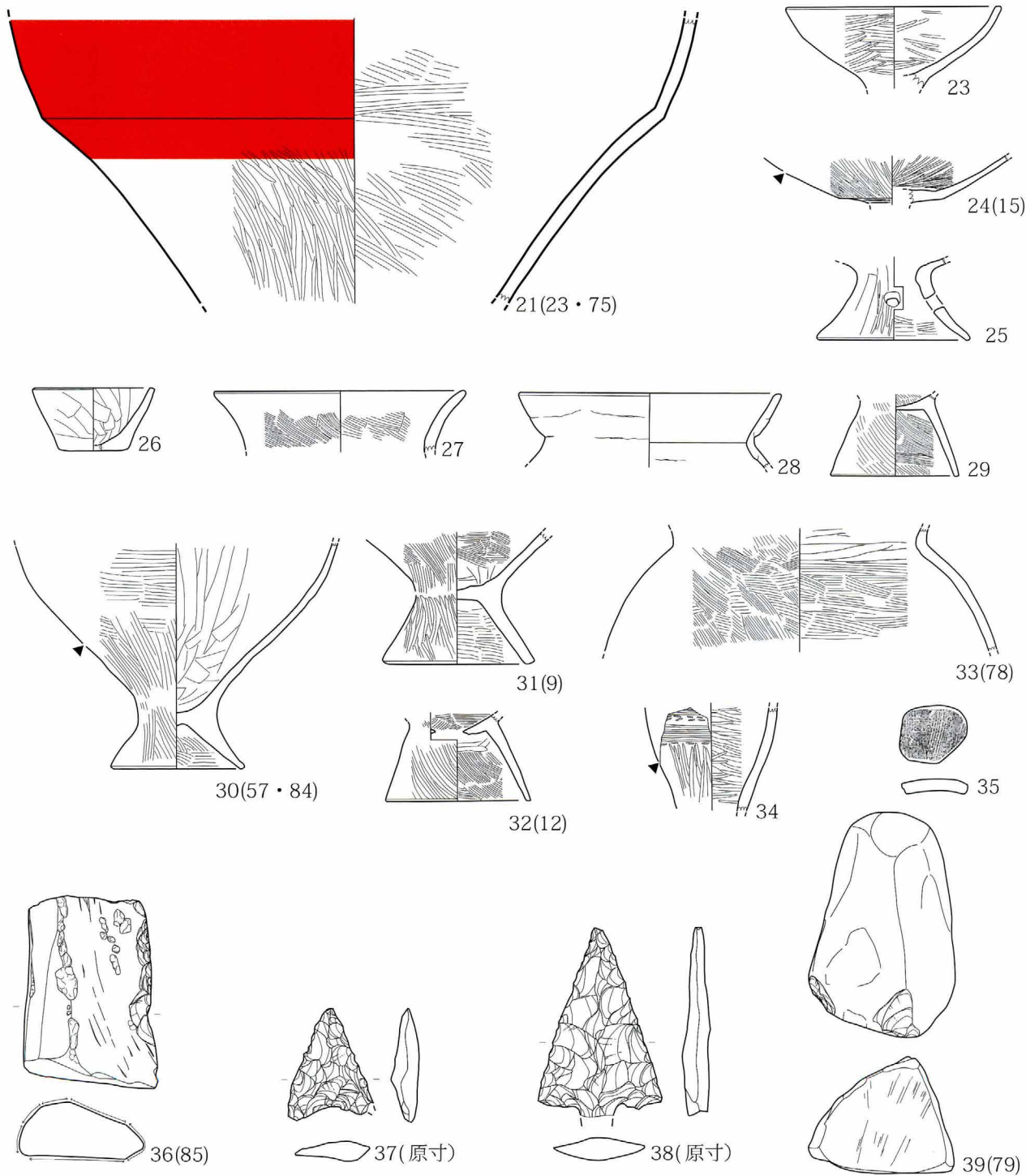
第9図 H15号住居址 (1)



第10图 H15号住居址(2)

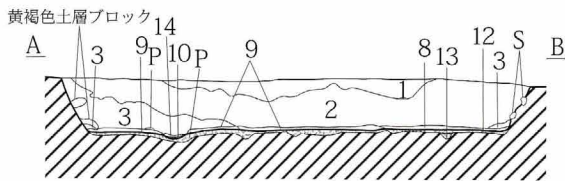
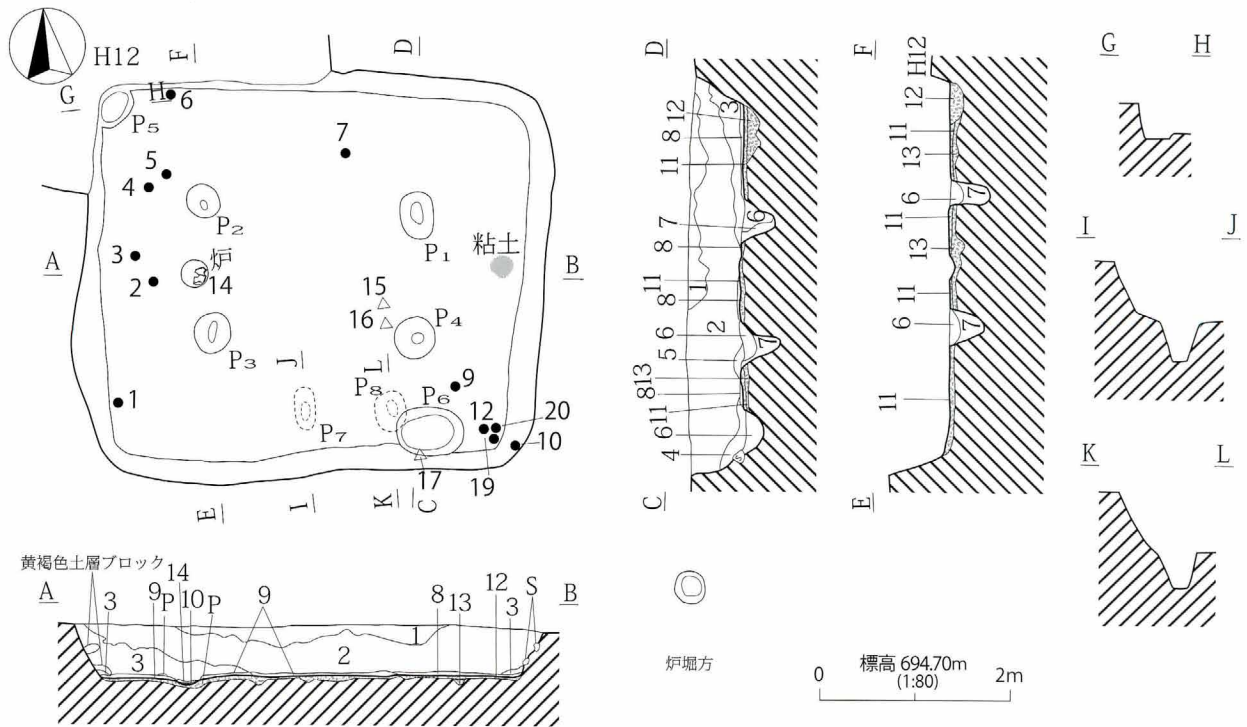
が支柱穴である。炉は地焼炉でP2、P3間のほぼ中央に構築されていた。堀方から検出されたP7、P8は出入口施設と思われる。P6は貯蔵穴の可能性が高いものと思われる。北西隅の壁下に構築されたP5、炉と同一直線上の東辺中央の壁下に検出された径22cm程の円形を呈する粘土の性格は不明である。遺物は南東隅付近及び、炉、P2の西方壁下付近から集中して出土している。

遺物は弥生土器、土師器、ガラス小玉、緑色凝灰岩剥片が出土した。弥生土器には高坏（1～7）、甕（8～10）、壺（11～14）の器種が認められる。高坏は体部に稜を持って立ち上がり、口縁部が外反する坏部形態で、口唇部に

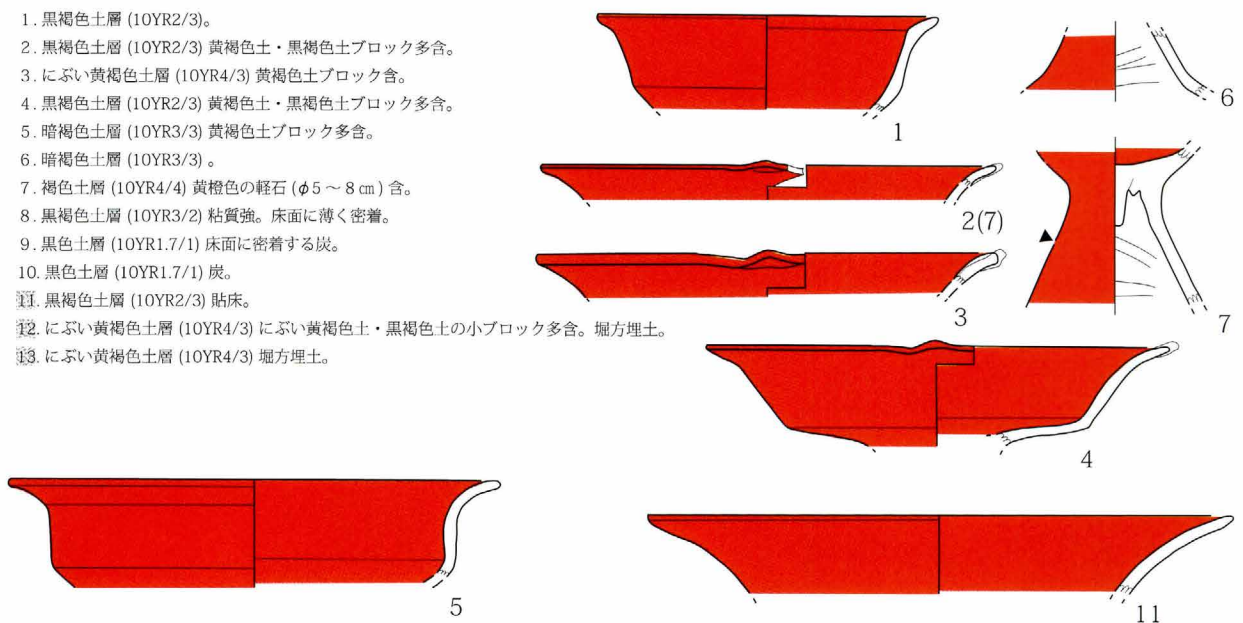


第11図 H15号住居址（3）

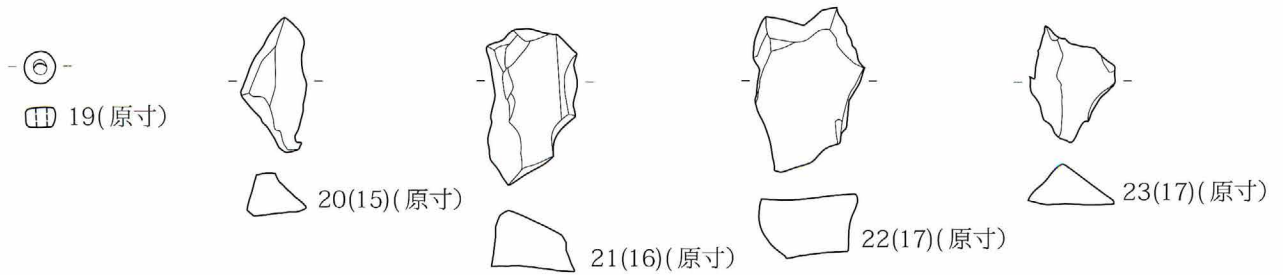
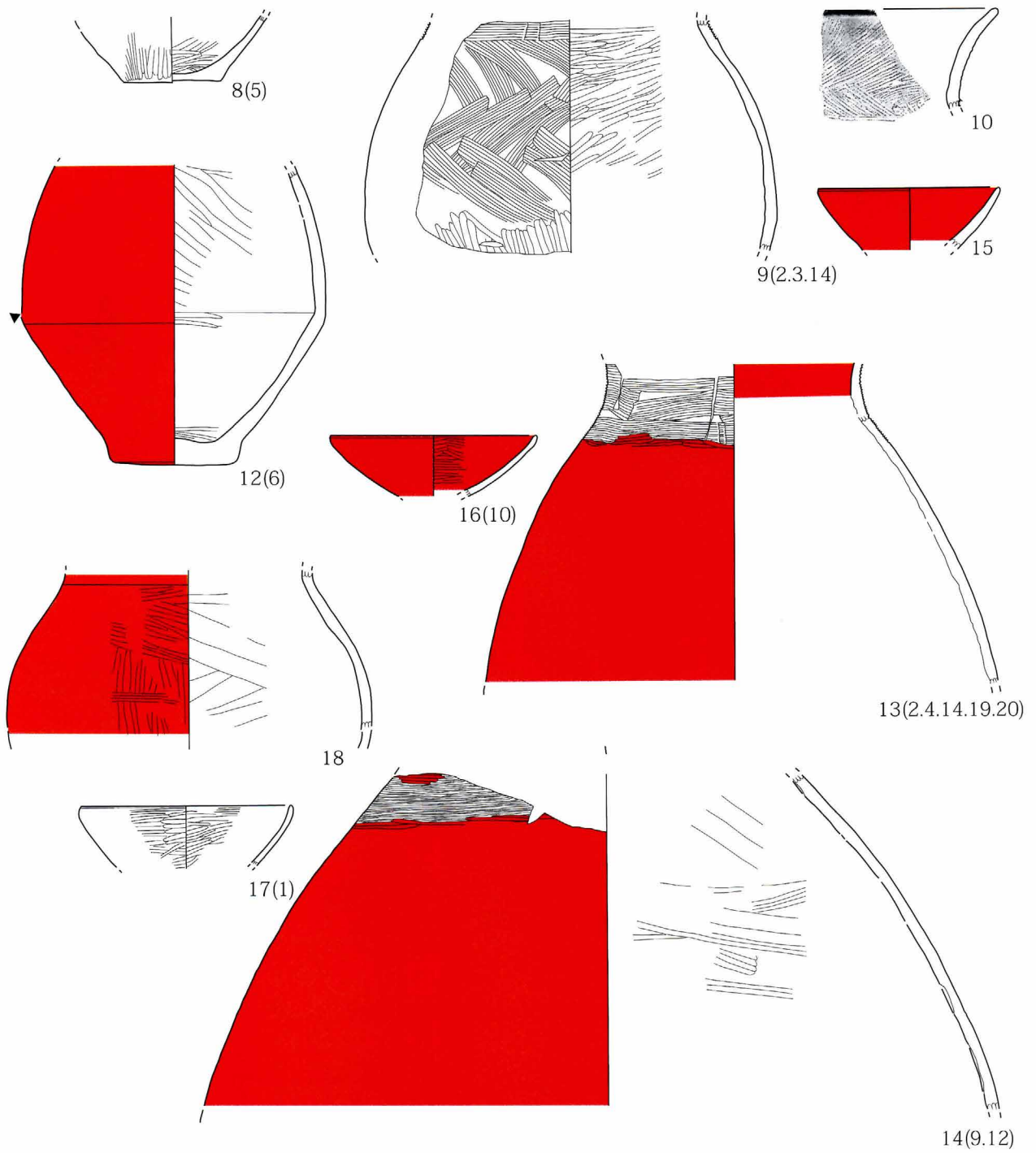
嘴状の突起が付加されるものも存在する。脚部は裾端部で大きく開く形態である。脚内面を除き赤彩が施される。甕は頸部櫛描簾状文、口縁部と体部上半に櫛描斜走文が施される。壺は完形の個体が存在しないため、全容は不明であるが、外面及び内面口縁部～頸部まで赤彩が施される。頸部には櫛描簾状文が多段に施文される他は無紋である。体部下半には稜を有し、通常はこの稜を境に底部方向には赤彩が施されないが、12は施されている。口縁部が残存しているものは素口縁で大きく外反し開いている。土師器には高环か鉢(15～17)、壺(18)の器種が認められる。15・16は内外面、18は外面に赤彩が施される。ガラス小玉は緑がかった淡い青色を呈し、端正な形状である。緑色凝灰岩剥片は玉造の素材として用いられる石材であり、集落内で玉造が行われた可能性を示唆する。



1. 黒褐色土層 (10YR2/3)。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土・黒褐色土ブロック多含。
3. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 黄褐色土ブロック含。
4. 黒褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土・黒褐色土ブロック多含。
5. 暗褐色土層 (10YR3/3) 黄褐色土ブロック多含。
6. 暗褐色土層 (10YR3/3)。
7. 褐色土層 (10YR4/4) 黄橙色の軽石 (φ5～8cm) 含。
8. 黒褐色土層 (10YR3/2) 粘質強。床面に薄く密着。
9. 黒色土層 (10YR1.7/1) 床面に密着する炭。
10. 黒色土層 (10YR1.7/1) 炭。
11. 黒褐色土層 (10YR2/3) 貼床。
12. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) にぶい黄褐色土・黒褐色土の小ブロック多含。堀方埋土。
13. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 堀方埋土。



第12図 H16号住居址 (1)



第13图 H16号住居址(2)

第6表 H16号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量			成 形・調 整		備 考	出土層位
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面		
1	弥生土器	高坏	(18.0)	—	<5.0>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅲ区
2	弥生土器	高坏	(24.0)	—	<2.0>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	No7
3	弥生土器	高坏	(24.3)	—	<2.5>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅲ区
4	弥生土器	高坏	(25.4)	—	<5.7>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅲ区
5	弥生土器	高坏	(26.0)	—	<5.8>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅳ区、H12
6	弥生土器	高坏	—	—	<3.4>	ヘラナデ	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅲ区
7	弥生土器	高坏	—	—	<8.2>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	完全実測	Ⅲ区
8	弥生土器	甕	—	6.2	<4.3>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完全実測	No5
9	弥生土器	甕	—	—	<15.2>	ヘラミガキ	櫛描簾状文・波状文	回転実測	No2・3・14
10	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描簾状文・斜走文	破片実測・拓本	I区
11	弥生土器	壺	(30.8)	—	<5.2>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅲ区
12	弥生土器	壺	—	7.8	<19.5>	ヘラミガキ	ヘラミガキ、赤彩	完全実測	No6、Ⅲ区
13	弥生土器	壺	—	—	<20.6>	ヘラミガキ、赤彩	櫛描簾状文、赤彩	完全実測	No2・4・14・19・20
14	弥生土器	壺	—	—	<22.0>	ハケ目、ヘラナデ	櫛描横線文、赤彩	完全実測	No9、No12
15	土師器	高坏 or 鉢	(11.8)	—	<4.0>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅲ区
16	土師器	高坏 or 鉢	(13.4)	—	<4.0>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	No10
17	土師器	高坏 or 鉢	(13.6)	—	<3.9>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	No1
18	土師器	壺	—	—	<11.7>	ヘラナデ	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	Ⅲ区
19	ガラス	小玉	0.4	0.4	0.25	重量0.08 g、孔径0.2、淡青色		完全実測	覆土
20	緑色凝灰岩	剥片	1.8	0.9	0.6	重量0.72 g、玉の素材?		完全実測	No15
21	緑色凝灰岩	剥片	2.1	1.4	0.7	重量2.26 g、玉の素材?		完全実測	No16
22	緑色凝灰岩	剥片	2.2	1.5	0.8	重量2.25 g、玉の素材?		完全実測	No17
23	緑色凝灰岩	剥片	1.5	1.1	0.55	重量0.71 g、玉の素材?		完全実測	No17

第7表 H17号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量			成 形・調 整		備 考	出土層位
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面		
1	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文	破片実測・拓本	覆土
2	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文、折返し口縁	破片実測・拓本	覆土
3	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文、簾状文	破片実測・拓本	覆土
4	石器	砥石	17.8	14.5	6.5	重量2950.0 g、砥面数2		完全実測	No2
5	石器	敲石	15.0	12.9	6.5	重量1737.65 g、正面と縁辺に敲打痕		完全実測	No1

以上の出土遺物の特徴から、本址は古墳時代前期の所産と考えられる。

第8表 D2号土坑出土遺物観察表

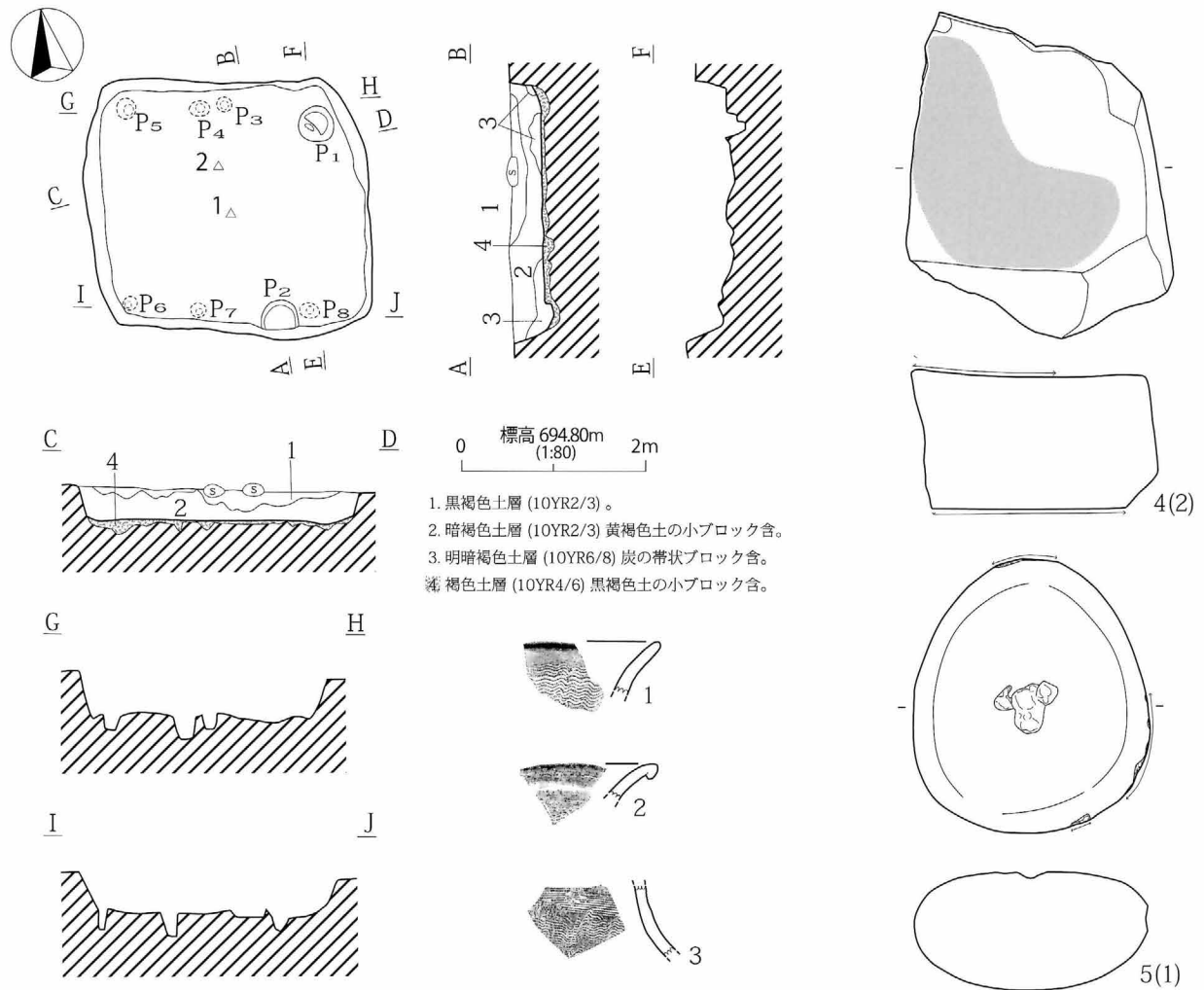
No	器種	器形	法 量			成 形・調 整		備 考	出土層位
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面		
1	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	櫛描波状文、簾状文	破片実測・拓本	覆土
2	弥生土器	壺	—	—	<15.8>	ヘラナデ、ハケ目	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	覆土

●H17号住居址（第14図）

お9グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-9°-Wに長軸方位をとる。長軸長 2.36m、短軸長 2.32m、壁残高 0.36m、面積 6.29 m²の規模で平行四辺形の平面である。床面上で2基、堀方から6基検出されたピットの配置に規則性・規格性は認められないため、支柱は不明である。炉・カマド・周溝は存在しない。

遺物は弥生土器と石器が出土している。弥生土器は全て甕の破片である。櫛描波状文や簾状文が施文される。2は折り返し口縁である。石器は砥石（4）と敲石（5）が出土している。

以上の出土遺物の特徴から、本址は弥生時代後期の所産と考えられる。



第14図 H17号住居址

第2節 土坑

●D2号土坑 (第15図)

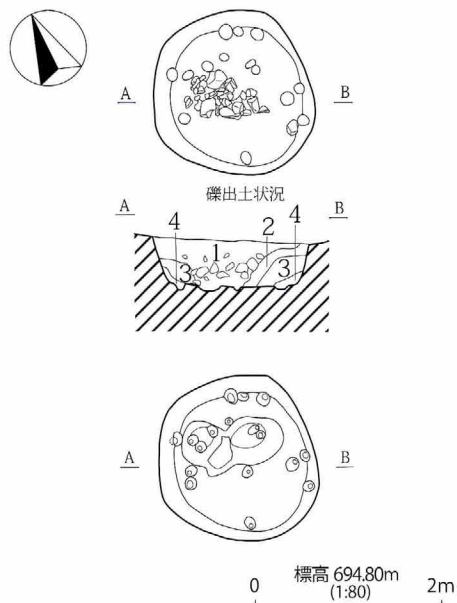
き4～お4グリットで検出された。H14号住居址を切る。N-25°-Wに長軸方位をとる。径1.72m、壁残高0.48m、面積2.95㎡の規模で、円形の平面である。覆土1層中には多量の礫が含まれていたが、埋没過程で本址覆土に混入したものである。底面から検出された無数の小径ピット及び、2基連結した形状の大きめのピットの性格は不明である。覆土中に多量の炭化物を含むことが本址の特徴のひとつである。

遺物は弥生土器が2点出土している。1は櫛描波状文、簾状文が施文された甕の体部片、2は外面に赤彩が施される壺の体部片である。

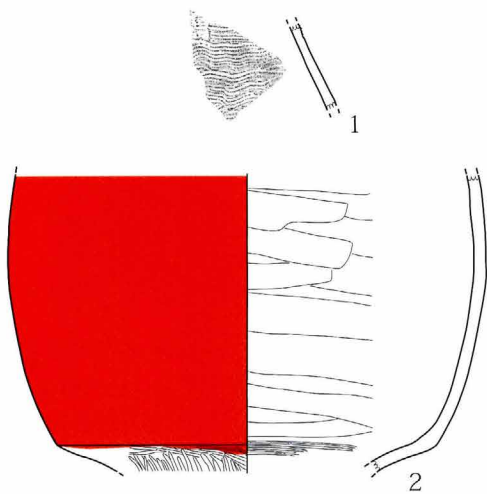
本址が切るH14号住居址は古墳時代前期の所産であることが想定されることから、本址は古墳時代前期以降に構築されたものとなる。出土遺物は本来はH14号住居址に帰属する可能性が高い。

●D3号土坑 (第16図)

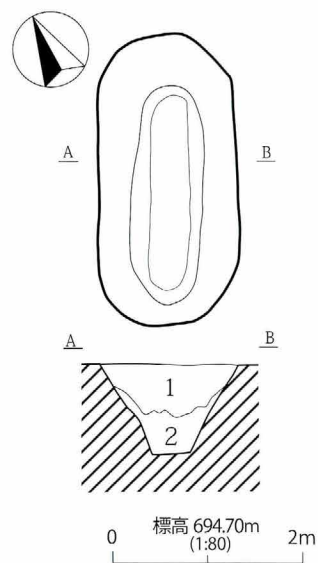
か3グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-29°-Wに長軸方位をとる。長軸長3.08m、短軸長1.46m、壁残高0.94m、面積4.49㎡の規模で、楕円形の平面である。幅狭な底面のある、「V」字形の断面を呈しており、底面に逆茂木を立てた小径ピットは有さないものの陥穴の可能性が高い。



1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 黄褐色土小ブロック少含。下部炭多含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/4) 黄褐色土ブロック多含。
3. 黒褐色土層 (10YR2/3) 下部炭多含。
4. 暗褐色土層 (10YR2/3)。

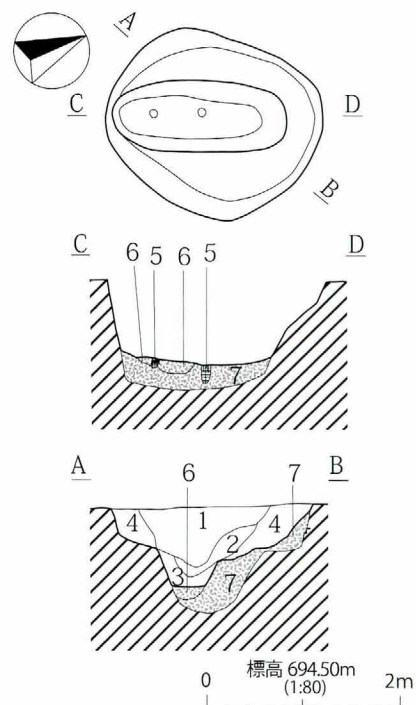


第15図 D 2号土坑



1. 黒褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土ブロック多含。
2. 褐色土層 (10YR4/4) 黒褐色土小ブロック多含。黄褐色土パミス (5 ~ 10cm) 多含。

第16図 D 3号土坑



1. 黒褐色土層 (10YR2/3) 黄褐色土ブロック含。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) 黄褐色土大ブロック含。
3. 暗褐色土層 (10YR3/4) 黄褐色土小ブロック多含。
4. 褐色土層 (10YR4/4) 黄橙色のパミス多含。
5. 黒褐色土層 (10YR2/3) 逆茂木の跡。
6. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 黄褐色土小ブロック多含。
7. 黄褐色土層 (10YR5/6) 黄褐色土小ブロック多含。

第17図 D 4号土坑

出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

●D 4号土坑（第 17 図）

お 10 グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-41° -Wに長軸方位をとる。長軸長 2.28m、短軸長 1.96m、壁残高 0.86m、面積 4.47 m²の規模で、不整な円形の平面である。本址は陥穴であり、逆茂木を埋設固定している。そのため、堀方が存在する。基本的に不整円形のプラン内に楕円形の土坑を内包した平面と成り、短軸方向の断面は、緩やかな傾斜面が急角度で「V」字状に落ち込み、幅狭の底面に達する形態となる。逆茂木痕は 2 本であった。

出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

第 3 節 溝址

●M1・7号溝址（第 18 図）

調査区南半で検出された。他遺構との重複関係は有さない。平成 8 年に調査が行われた松ノ木遺跡 I で検出された M 1 号溝址と本址は同一の遺構であり、発掘調査担当者は周辺の地形、字界などから前方後円の状態を呈すると認識し、その規模は後円部径 40m、前方部長 30m、全長約 64mの規模であるとしている。また、類似例として藤塚古墳群 4 号墳（平成 3・4 年度に調査）をあげている。溝址は括れ部が内側に 1 段テラスを形成し幅を増すほかは、不安定な幅ではあるものの断面は基本的に逆梯形で、深度も 70 cm～1 mあり、自然が形成したものではなく、人工物であることは間違いない。本址は塚原泥流の残丘を利用し構築されており、残丘上への盛土の存在も確認されている。主体部は確認されなかったため本址は溝址として取り扱ったが、墳丘墓である可能性を否定するものではない。

遺物は土師器、弥生土器、縄文土器、石器が出土している。土師器は S 字甕（1）、甕（2）の器種が認められる。S 字甕は口縁端部の面取りが省略されるものの、外反は認められない。甕は「ハケ調整く字甕」である。弥生土器は甕（3・4）、壺（5）、甗（6）の器種が認められる。甕 3 は底部片である。4 は櫛描波状文が施される口縁部片である。壺は受口口縁部分に櫛描波状文が施される。内外面赤彩である。甗は底部片であり、底部中央に単孔が穿たれる。内外面赤彩である。縄文土器（7）は後期堀之内式の深鉢体部片と思われる。石器（8）は敲石で、上下端に敲打痕が認められる。M 7 からは打製石鏃が 1 点出土している。

以上の極めて少量の出土遺物から本址の年代を比定するのは困難であるが、本址内に住居址群が重複しないことから、住居址群と同時期には存在していた可能性がある。

第 4 節 遺構外出土遺物

●土師器（第 19 図）

器台あるいは高坏と思われる（1・3）、高坏（2）、甕（4～10）、壺（11）の器種が出土している。高坏・器台の内 2・3 は脚部に円孔の透かしが穿たれる。単位は 3 である。甕はハケ調整であるが、底部片である 6・7 はヘラミガキ調整が施される。6 については、壺の可能性もある。法量的には 4 が小型甕のほかは通常である。9 のみ口唇部に刻目が施される。壺 11 は赤彩の可能性もある。

●弥生土器（第 19 図）

鉢（12）、鉢あるいは高坏（13）、高坏（14）、甕（15～18）、壺（19～25）の器種が出土している。鉢・高坏は脚内を除き赤彩が施される。甕は口縁部と体部上半に櫛描波状文が施される。頸部に簾状文を施すか否かは頸部位が残存するものが無いため不明である。口縁は 18 が折り返しのほかは素口縁である。壺は赤彩されるもの（21～25）と、されないもの（19・20）がある。頸部が残存する 20・21 は櫛描「T」字文が施される。口縁形状は受口（19・20・24・25）と素口縁（22）があり、受口で赤彩が施されるものは口縁部に 1 条の櫛描波状文を巡らしている。

●土製品（第 19 図）

26 の紡錘車は土器片を再利用したものではなく、紡錘車として焼成されたものである。紡錘車としては大型のものである。

●古銭（第 19 図）

27 の皇宋通寶が 1 枚出土している。

●石器（第 19 図）

第9表 遺構外出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量			成 形・調 整		備 考	出土層位
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面		
1	土師器	器台 or 高坏	(11.0)	—	<3.8>	ヘラナデ	ヘラナデ	回転実測	く 50
2	土師器	高坏	—	—	<5.3>	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実測	く 49
3	土師器	高坏	—	—	—	ナデ	ヘラミガキ	破片実測	く 50
4	土師器	甕	(7.0)	—	<5.9>	ヘラナデ	ハケ目	回転実測	う 47
5	土師器	甕	(13.2)	—	<4.3>	ハケ目	ヘラナデ	回転実測	く 49
6	土師器	甕	—	(3.6)	<3.3>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	こ 49
7	土師器	甕	—	4.9	<3.7>	ヘラナデ	ヘラミガキ	完全実測	く 50
8	土師器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	ハケ目	破片実測・拓本	こ 47
9	土師器	甕	—	—	—	ヘラミガキ	口唇部刻目	破片実測・拓本	く 50
10	土師器	甕	—	—	—	ヨコナデ	ハケ目	破片実測・拓本	き 49
11	土師器	壺	21.0	—	<6.8>	ヘラミガキ	ヘラミガキ、赤彩?	回転実測	か 10
12	弥生土器	鉢	(12.6)	3.7	5.7	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	完全実測	く 49、こ 47・50
13	弥生土器	鉢 or 高坏	(19.2)	—	<6.8>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	完全実測	こ 47・49
14	弥生土器	高坏	—	—	<5.2>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	完全実測	こ 51
15	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラナデ	櫛描波状文	破片実測・拓本	く 50
16	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラナデ	櫛描波状文	破片実測・拓本	こ 50
17	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラナデ	櫛描波状文	破片実測・拓本	く 49
18	弥生土器	甕	—	—	—	ヘラナデ	櫛描波状文、折返口縁	破片実測・拓本	き 49
19	弥生土器	壺	(18.8)	—	<4.5>	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転実測	こ 48
20	弥生土器	壺	(19.4)	—	<6.3>	ヘラミガキ	櫛描「T」字文	回転実測	こ 50
21	弥生土器	壺	—	—	—	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩、櫛描T字文	破片実測・拓本	
22	弥生土器	壺	(47.6)	—	<7.0>	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	く 50
23	弥生土器	壺	—	—	<10.7>	ハケ目、ナデ	ヘラミガキ、赤彩	回転実測	い 49、こ 50
24	弥生土器	壺	—	—	—	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩、櫛描波状文	破片実測・拓本	け 50
25	弥生土器	壺	—	—	—	ヘラミガキ、赤彩	ヘラミガキ、赤彩、櫛描波状文	破片実測・拓本	け 49
26	土製品	紡錘車	7.7	7.8	1.8			完全実測	う 9
27	古銭	皇宋通寶	2.4	2.4	0.1	0.8×0.8の方形孔		完全実測	こ 51
28	石器	刃器	13.9	5.8	1.5	重量 118.03		完全実測	き 12
29	石器	打製石鏃	1.9	2.0	0.3	重量 0.74、黒曜石		完全実測	い 3
30	石器	打製石鏃	<2.2>	1.1	0.35	重量 0.75、黒曜石		完全実測	え 9
31	石器	打製石鏃	<2.5>	<1.3>	<0.35>	重量 0.98、黒曜石		完全実測	え 12
32	石器	剥片	2.7	2.0	0.7	重量 3.51、黒曜石、加工痕		完全実測	い 48
33	石器	打製石鏃	<2.8>	1.8	0.3	重量 1.48、黒曜石		完全実測	い 8

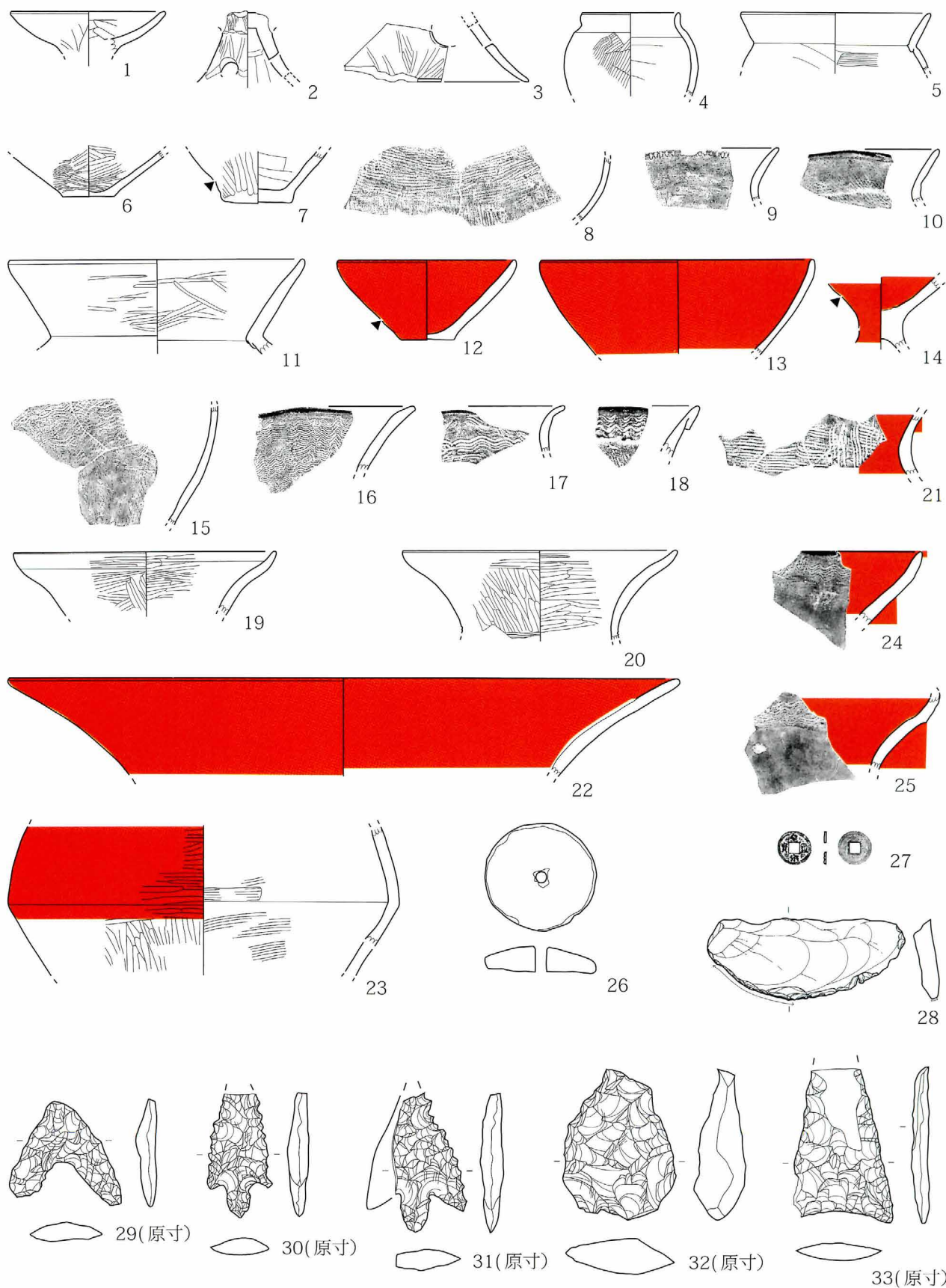
刃器(28)、加工痕のある剥片(32)、打製石鏃(29~33)が出土している。28を除き全て黒曜石製である。

第三章 まとめ

●古墳時代前期の土器について

今回の調査で検出された住居址は、古墳時代前期の所産である。重複関係からはH15よりH11、H13が新しい。また、H16よりもH12が新しく、更にH12よりもH13が新しくなる。しかし、H13号住居址の出土遺物は極めて貧弱であり比較資料にはならないため、H11-H15、H12-H16の土器様相を比較し、各々の住居址間に存在する時間が、時期区分を可能とするものであるかを検証し、時期を考察する。

・H11-H15：遺物量が極端に異なるため比較出来ない部分もあるが、2軒共に弥生時代後期箱清水式の土器



第19図 遺構外出土遺物



第10表 遺構計測表

遺構名	重複関係	検出位置	主軸方位	規			模	ピット	付属施設	時期
				長軸長	短軸長	壁残高(深度)	面積			
H 11	H15 を切る	え3	N -10° - W	5.00	5.00	0.24	28.11	主 4+3	炉	古前
H 12	H13 に切られる	か6	N -97° - W	5.60	4.28	0.36	26.64	主 4+3	炉	古前
H 13	H12・15 を切る	か5	N -96° - W	2.24	2.00	0.52	4.88	主 4+3		古前以降
H 14	D2 に切られる	か4	N -15° - E	2.52	2.10	0.44	6.752	14	炉	古前
H 15	H11・13 に切られる	お4・5	N -15° - W	6.56	5.52	0.44	42.70	主 4+4	炉、間仕切、堀 P1	古前
H 16	H12 に切られる	お7	N -97° - W	4.16	3.60	0.56	16.70	主 4+2	炉、堀 P2	古前
H 17	なし	お9	N - 9° - W	2.36	2.32	0.36	6.29	2	堀 P6	古前
D 2	H14 を切る	き4~お4	N -25° - W	1.72	1.72	0.48	—	—	—	古前以降
D 3	なし	か3	N -29° - W	3.08	1.46	0.94	—	—	—	不明
D 4	なし	お10	N -41° - W	2.28	1.96	0.86	—	—	—	不明

は残存している。H11 では高坏・壺がH15 では鉢・高坏・壺・無頸壺・甕の器種が認められる。甕以外の器種には赤彩が施されるか、赤彩が施されないものが存在する。甕の文様は櫛描波状文と斜走文の双方が認められ、頸部には櫛描簾状文が施されている。H15-6・7 の有段高坏の口縁部が直立に近い外反であることは古い要素として捉えられるような気もするが、H15-19 の壺は箱清水式の文様構成でありながら、器形や赤彩範囲は大きく異なる。

このような弥生後期の土器群に対し、H11 では坏部下半に稜を形成する高坏やハケ調整の甕（平底・台付）が、H15 では坏部下半に稜を形成するものや碗形の高坏・器台・ハケ調整の甕（平底・台付）・形態的には弥生時代と同様であるが、ヘラ調整で無彩、平坦に面取りされた口唇部を有する鉢、瓢壺などが認められる。

以上の出土遺物を比較する限り大きな時間差は認められない。しかし、住居址の形態を見るとH15は長方形を呈し、柱穴の形態や位置、炉の位置等は弥生的であり、住居址形態の分析も重要であることを再認識させられる。H11・H15の時期であるが、1988年宇賀神編年表の東信I期古段階、1993年宇賀神「4世紀を中心とした土器編年表」の佐久平I期古、1996年富沢編年に準拠すれば古墳時代前期I期に該当しよう。

・H12-H16：H16は出土遺物の大半が弥生時代後期箱清水式土器であり、器種的には高坏・甕・壺の器種が認められる。高坏・壺は全てに赤彩が施されており、高坏は有段である。甕の文様は櫛描簾状文・斜走文であり、波状文は認められない。土師器は鉢ないし高坏、壺の器種が認められる。赤彩は箱清水式のように塗り込み、研磨するものでなく、塗布するものである。H12は鉢・高坏・甕・壺の器種が認められるが、破片資料であり出土遺物の主体は土師器である。鉢・高坏・壺には赤彩が施され、甕は櫛描波状文・簾状文・斜走文が施される。土師器は脚部に円孔透かしを有し、坏部下半に稜を形成する高坏が多く出土している。坏部が小型で直立気味に開くタイプと、比較的大型で外反するタイプの2種類が認められる。脚は大きく「ハ」字に開脚するものと、直線的に「ハ」字に開脚するものがある。高坏以外にはハケ調整の甕（平底・台付）・有段口縁壺が出土している。H12-13の土器は有段口縁の壺か、器台であるのか判断しかねるが、内面口唇下に施される1本の平行沈線の存在から壺とした。赤彩され、外面口縁部には櫛描の横位条線が巡る。外来系の土器であるが、器種が壺か器台かで系統は大きく異なる。もう1点気になる遺物としてH12-29の土器片円板がある。穿孔された把手を有する土器片が素材であるが、このような土器はあまり類例を知らない。なお、H16からは緑色凝灰岩の剥片が4点出土している。住居址東辺中央壁下で出土した粘土の存在と考え合わせると「玉造り」を行っていた可能性がある。

以上の出土遺物を比較すると若干の時間差は認められるものの、H12・H15は1988年宇賀神編年表の東信I期古段階、1993年宇賀神「4世紀を中心とした土器編年表」の佐久平I期古、1996年富沢編年に準拠すれば古墳時代前期I期に該当しよう。

時期区分が可能な程ではないが、H15よりはH16の方が若干古く、H11・H15よりはH12の方が若干新しい様相のようにも思われる。出土土器量が住居址毎に異なるので共通する根拠を求めることは困難ではあるが、弥生時代後期箱清水式の土器、特に壺については、H16の方がH15よりは箱清水式の範疇に収まっている。また、土器全体に占める土師器の量が少なく、特に高坏に関しては顕著である。以上から下記のような時間差を提起しておく。

H16→H15・H11→H12

古 新

尚、当資料と佐久市出土の古墳時代前期既出資料との関係は下小平遺跡のY1・2・4住が当遺跡H16に若干先行し、Y3が当遺跡H12と並行かやや後出、腰巻遺跡第5号住居址は後出、深堀遺跡Ⅳの概期住居址は後出、当遺

跡の1・2次調査で検出された住居址のうち、H3・6・9が後出と思われる他は同時期であろう。

●墳丘墓について

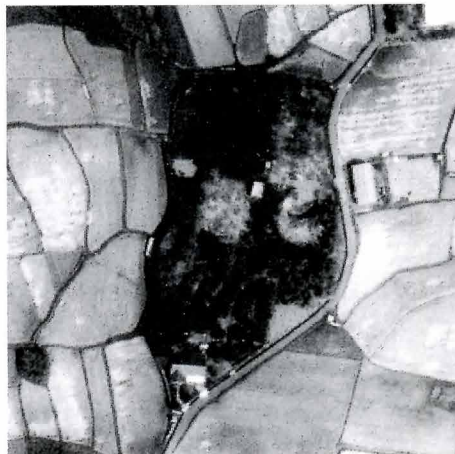
本文中でも述べたが、溝址M1・M7により区画される範囲は、前方後円形を呈する。佐久市で同様な事例は平成4年に調査が実施された藤塚古墳群4号墳がある。平地の微高地上の塚原泥流残丘墳を利用し、墳丘を溝で区画するという共通点を持つ。同時代の墳丘墓である瀧ノ峯1・2号墳は、立地が尾根上であること、群集することなどから、性格を異にするものとする。また、根々井大塚古墳は残丘の頂上を利用して構築されており平面形態は方形が推測されている。区画溝を持たないことも本址や藤塚古墳群4号墳との大きな違いであろうか。

藤塚古墳群4号墳を前方後円形と捉えるのか、円形の墳丘墓と方形周溝墓の2基に分離して捉えるのかは難しい問題であるが、墳丘墓であることは間違いないであろう。現状での墳丘高が1.5mほどあったにもかかわらず、主体部が残存していなかったことを考えると2mを超える高さを有していたことになり、規模的には古墳と遜色ない。本址も同様な墳丘高を有していたとすれば、巨大と言える規模であるが、区画する溝は貧弱である。いずれにせよ、古墳時代前期の佐久平に特異な墳丘墓が複数存在することを明らかにした事は本調査の大きな成果と言えよう。



(株) こうそく撮影

平成6年撮影航空写真にも前方後円形のランドマークが確認できる。

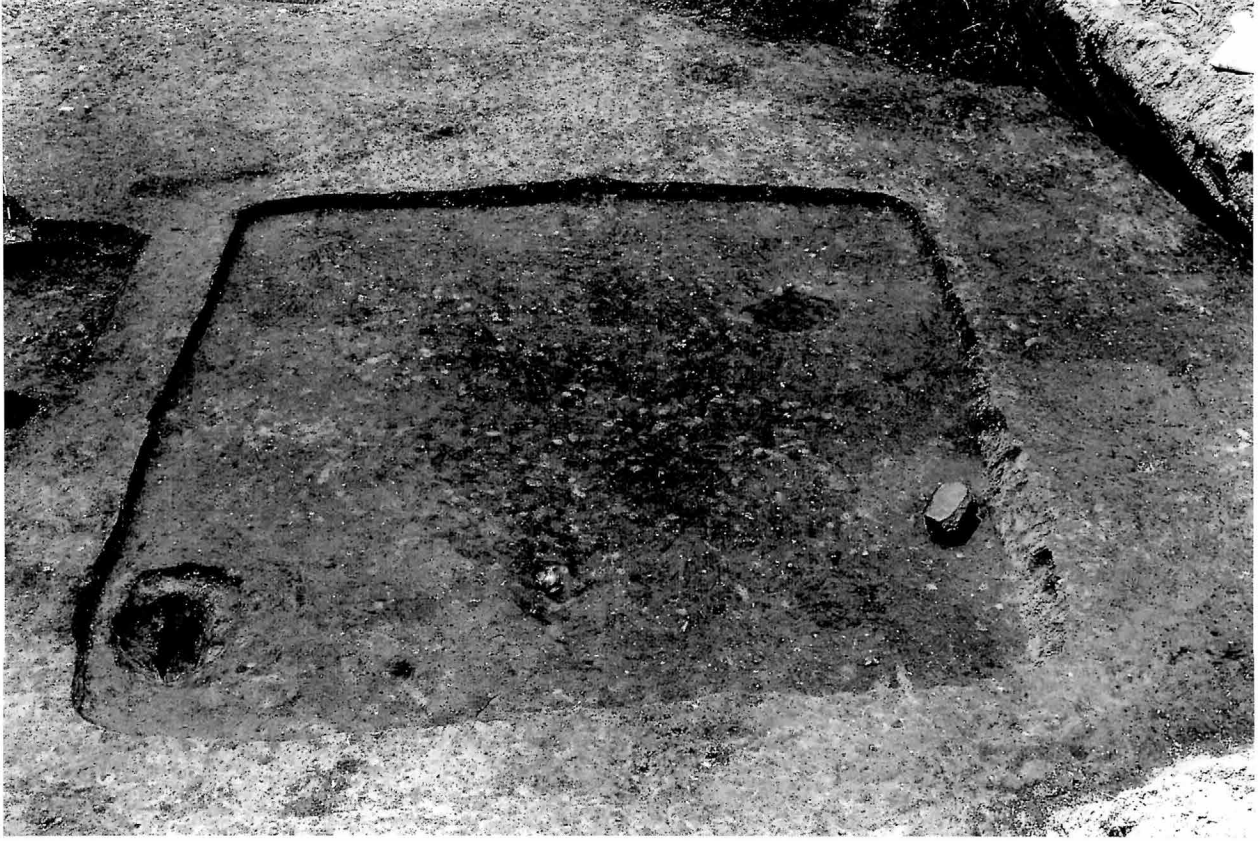


(株) 東洋航空事業撮影

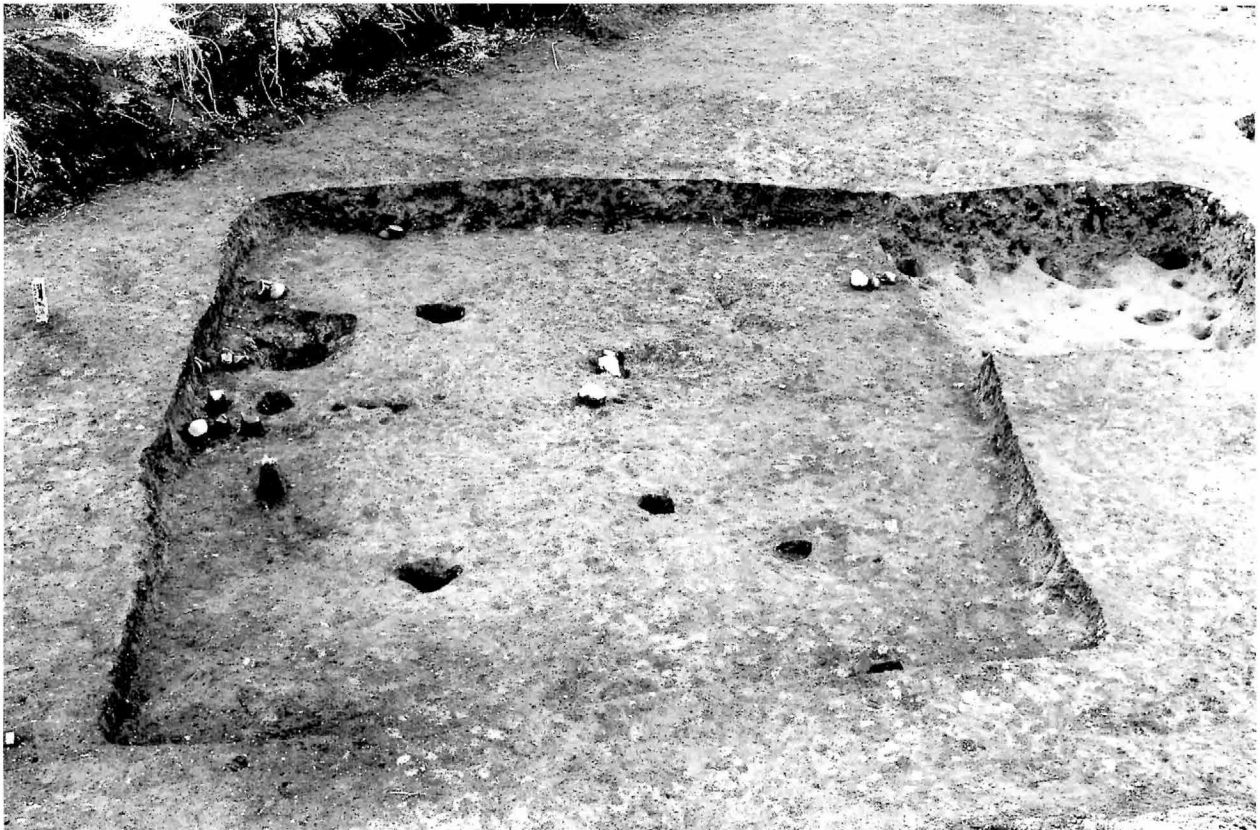
昭和47年撮影航空写真 前方後円形のランドマークが確認できる。墳丘も平成6年撮影時よりも高めに見える。

引用・参考文献

1. 1986 瀧の峯古墳群 佐久市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第14集
2. 1988 宇賀神誠司 「長野県における古墳時代前期の地域動向」 長野県埋蔵文化財センター紀要2
3. 1993 科野における古墳出現期研究の現状と課題 長野県考古学会誌 69・70
4. 1994 高村博文 藤塚遺跡群・藤塚II 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第26集
5. 1996 富沢一明 「佐久平に於ける古墳時代の土器編年試案」 長野県考古学会誌 79
6. 1997 青木一男 「土器群の動態からみた御屋敷期」 長野県考古学会誌 82
7. 1998 青木一男 「第2節古墳時代前期の土器の理解」 長野県埋蔵文化財センター
上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡 弥生総論6
8. 2001 富沢一明 根々井大塚古墳 佐久市文化財年報9
9. 2001 松ノ木遺跡I・II 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第91集
10. 2011 赤塚次郎 S字甕研究室 <http://ukigami.com/esuji>



H11号住居址完掘



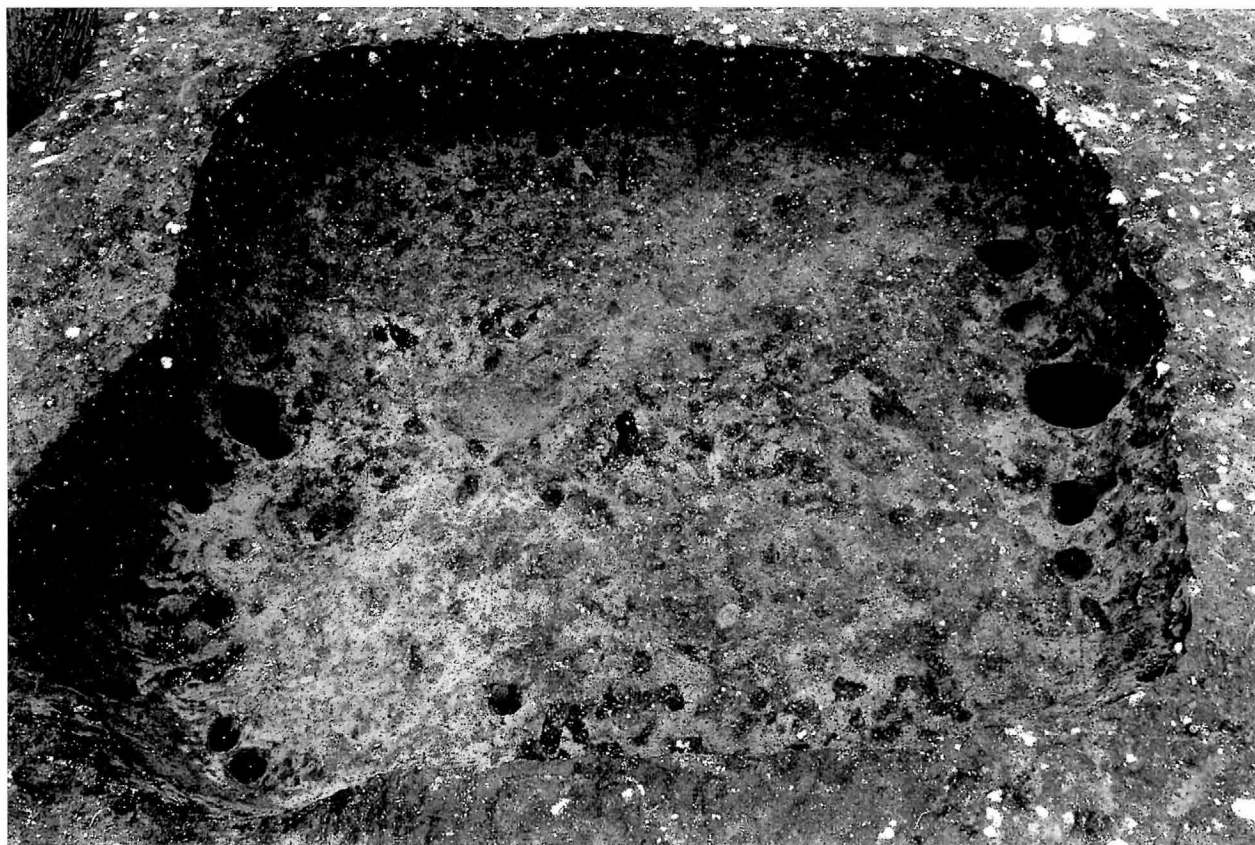
H12号住居址完掘



H12号住居址遺物出土狀況



H13号住居址完掘



H14号住居址完掘



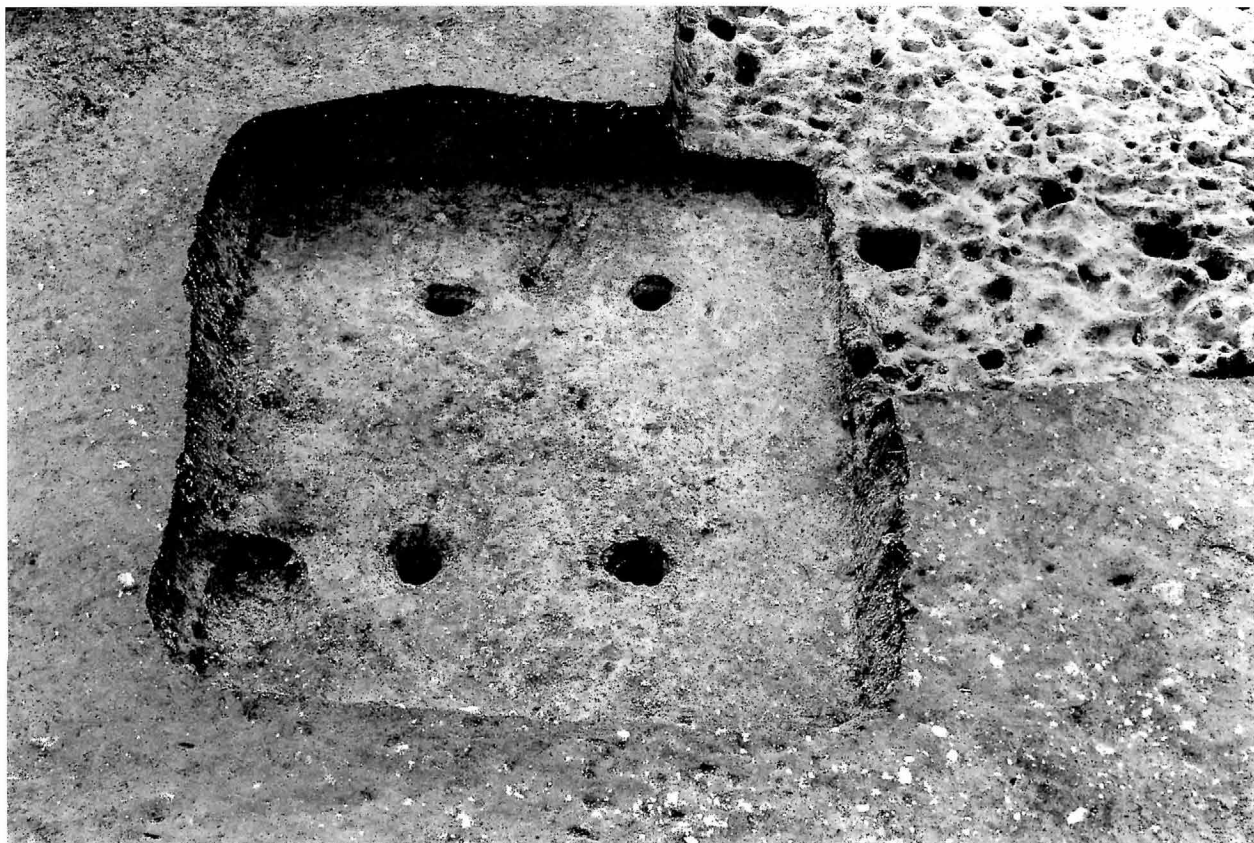
H14号住居址遺物出土狀況



H15号住居址完掘



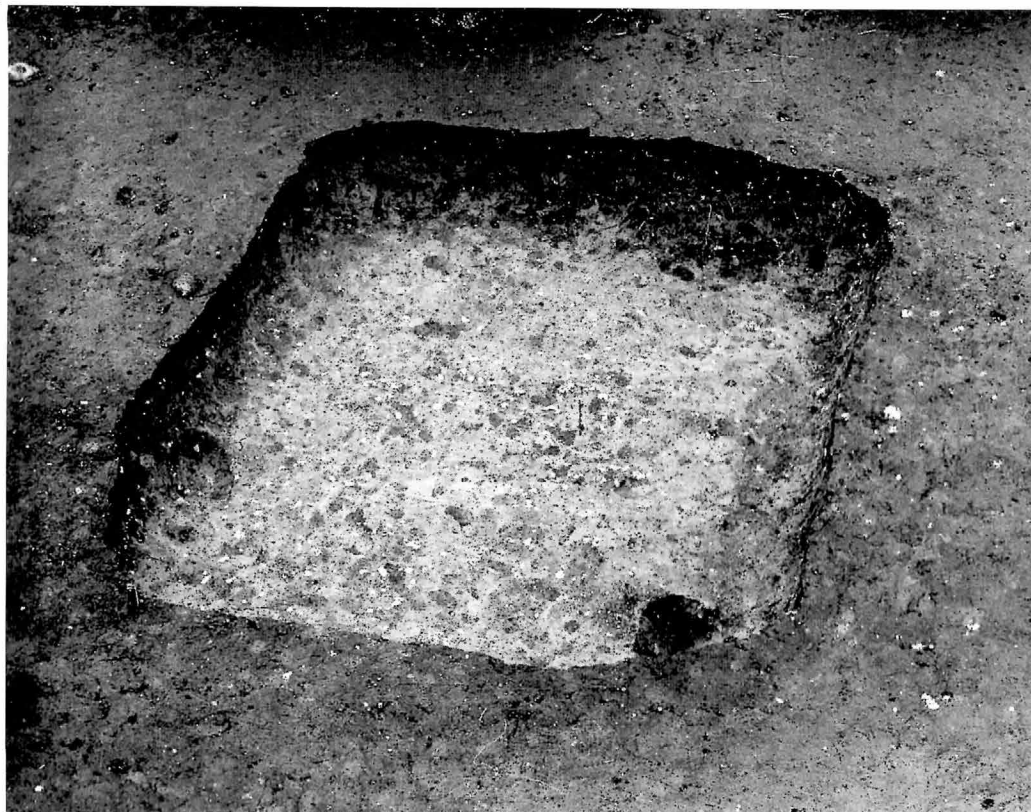
H15号住居址堀方



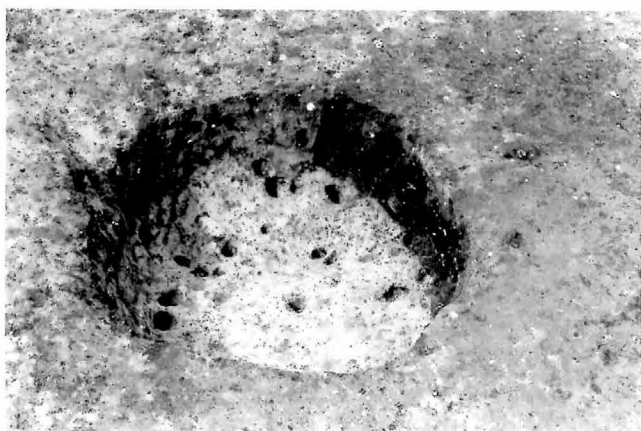
H16号住居址完掘



H16号住居址遺物出土狀況



H17号住居址完掘



D 2号土坑完掘



D 3号土坑完掘



D 4号土坑完掘



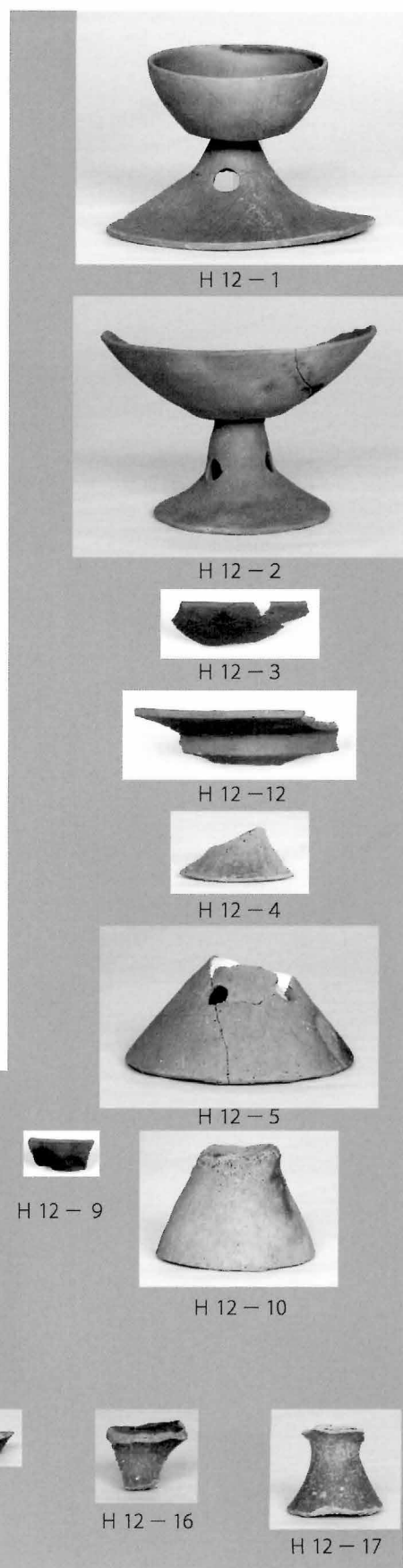
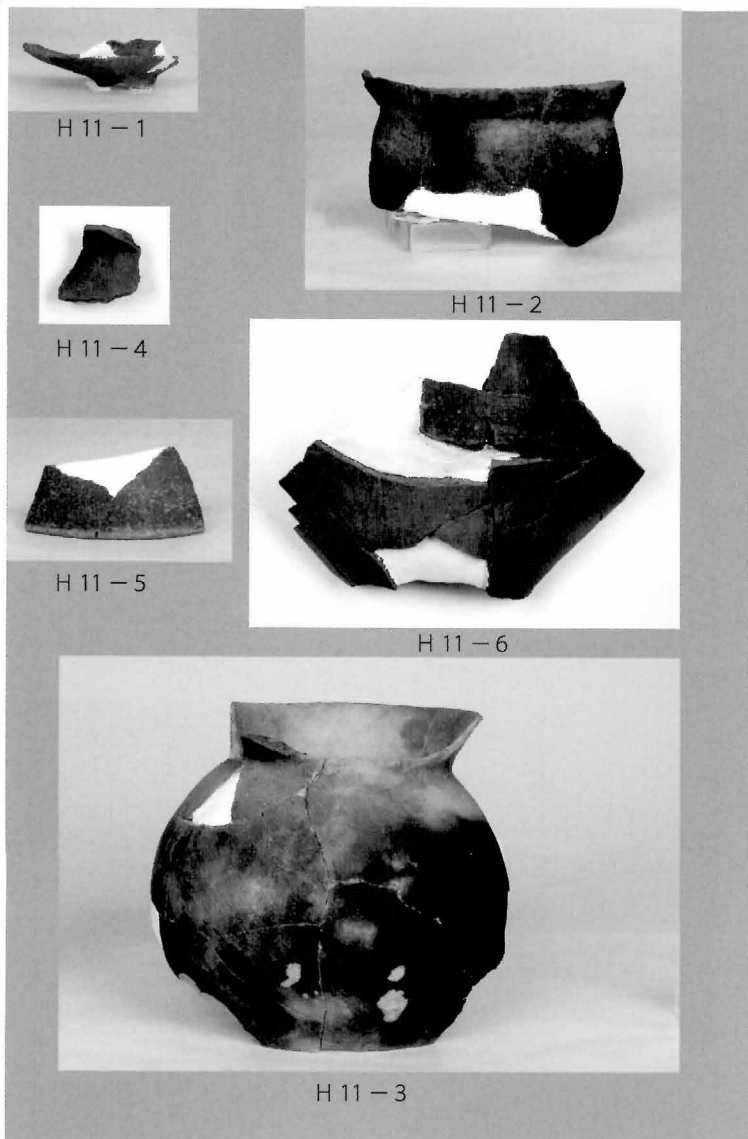
D2-2

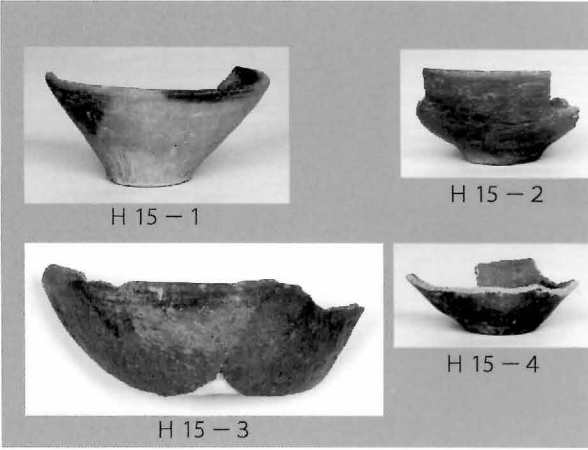
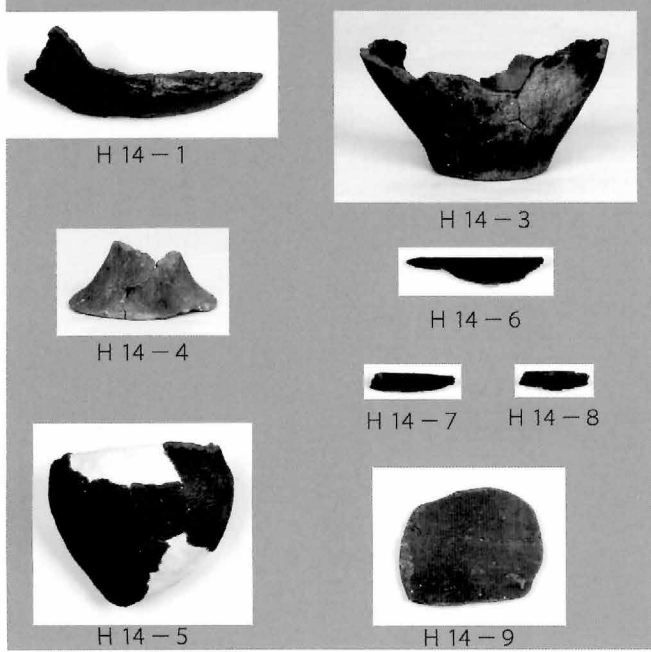
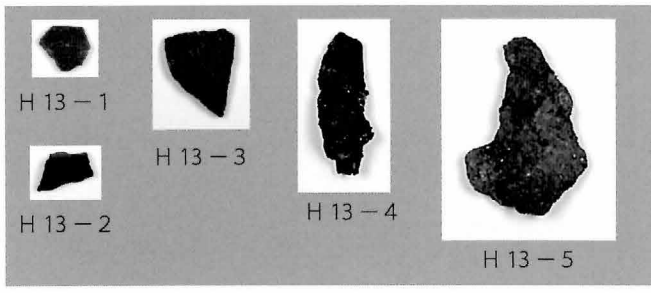
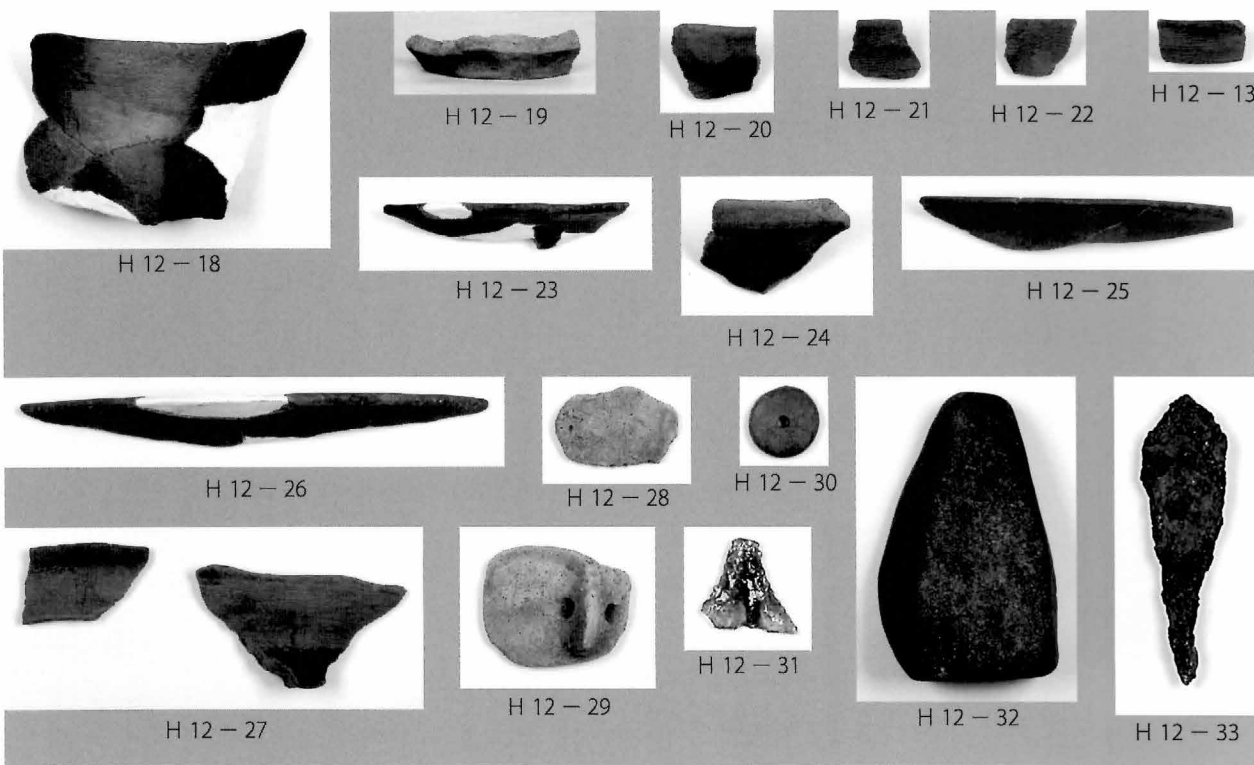
D2-1



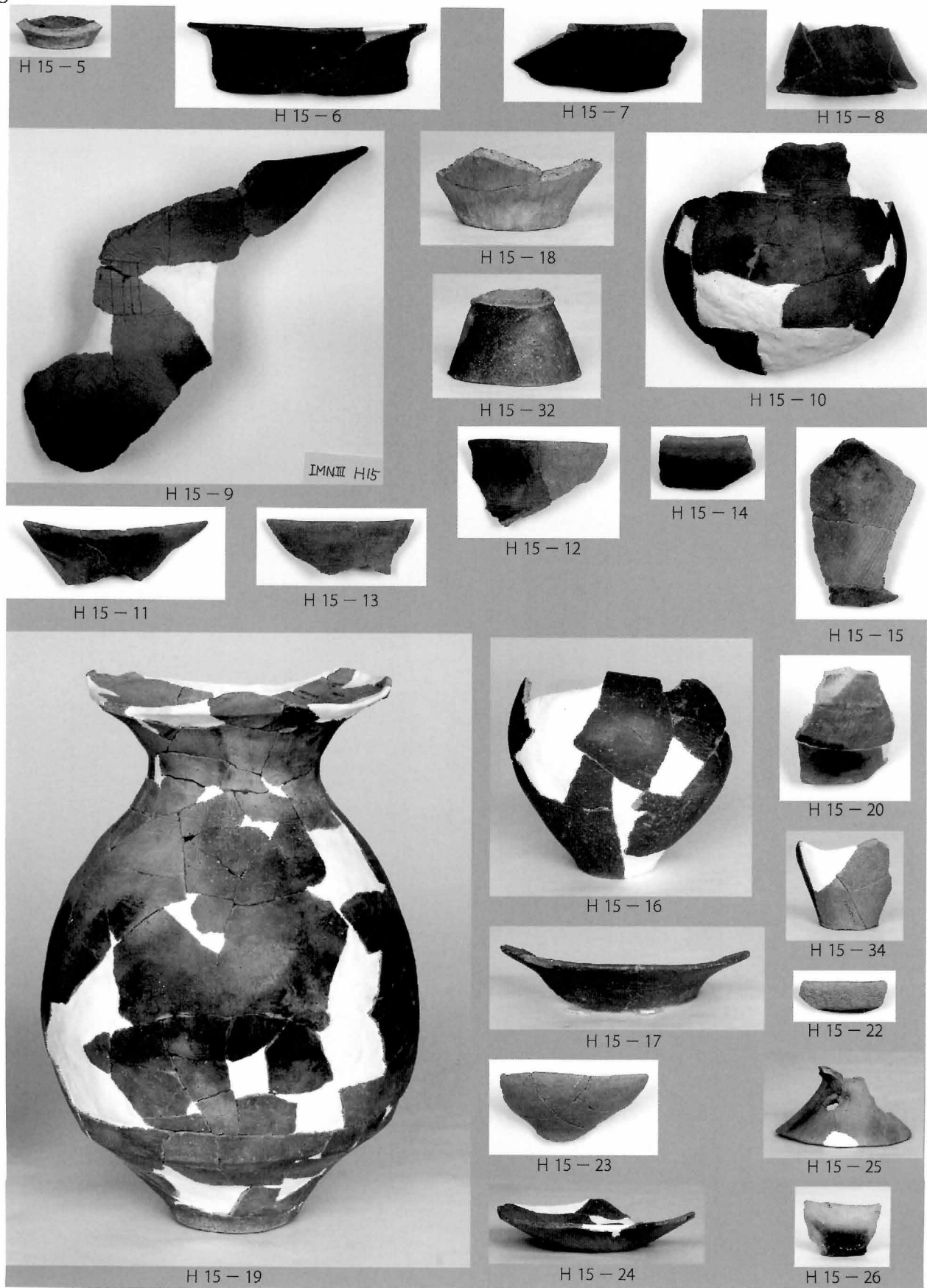
住居址群全景

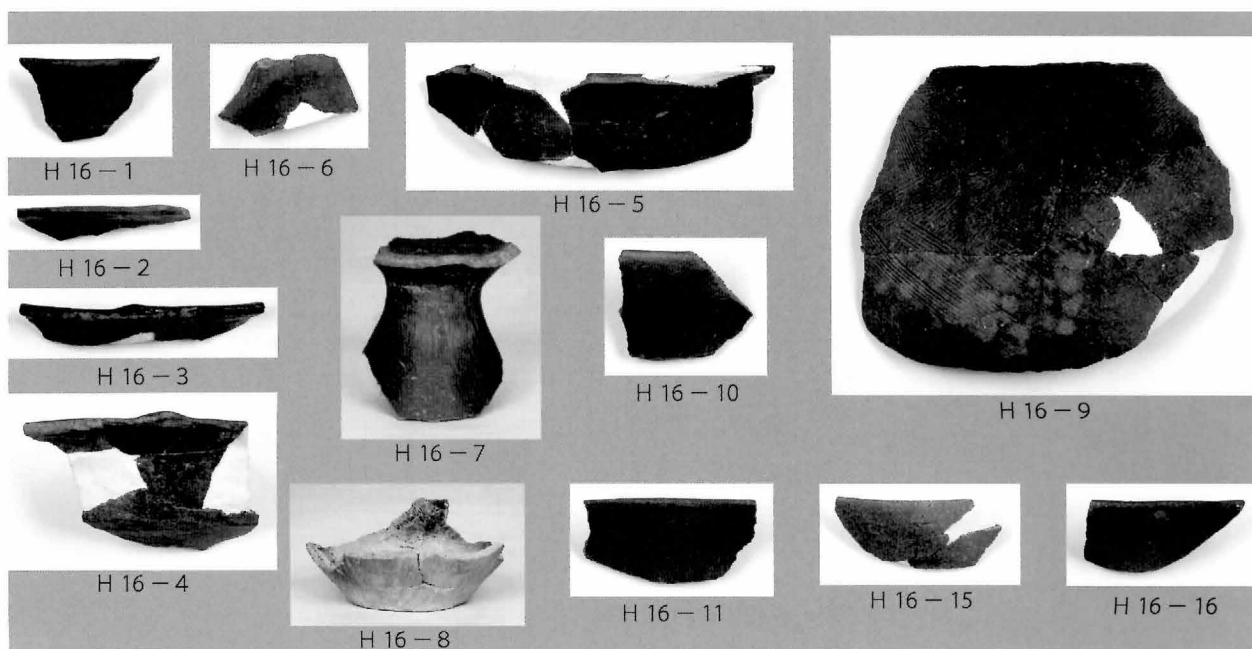
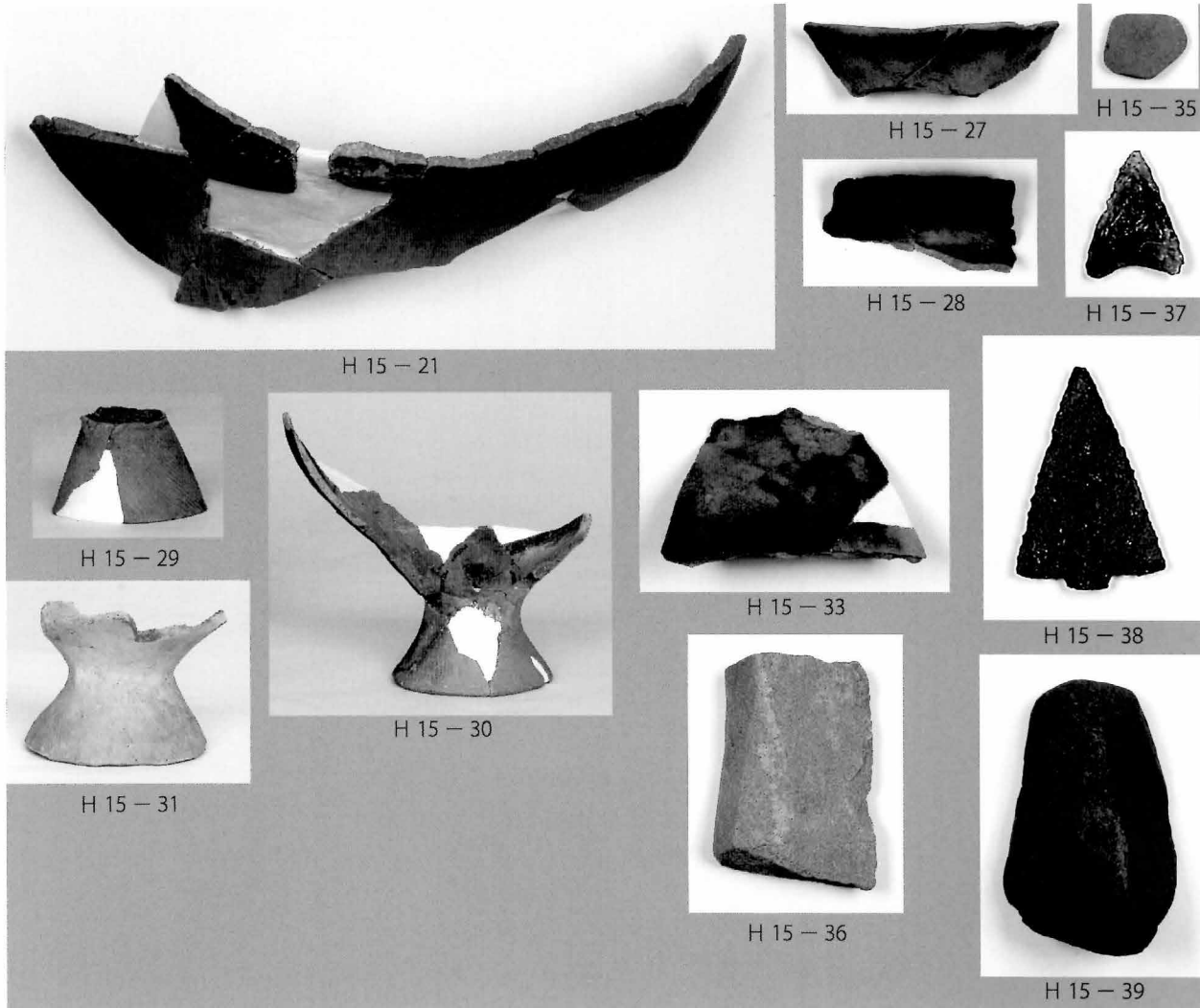
图版 8





图版10



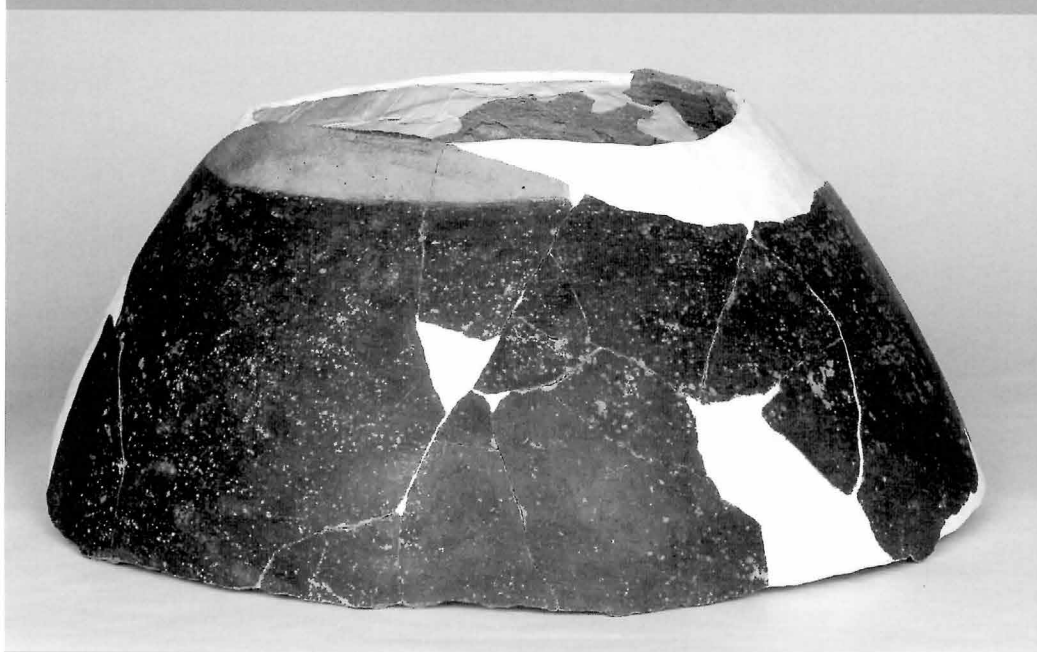




H 16-12



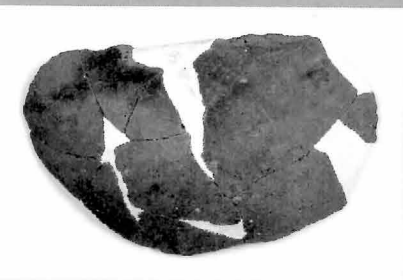
H 16-13



H 16-14



H 16-17



H 16-18



H 16-19



H 16-20



H 16-21



H 16-22



H 16-23



報 告 書 抄 録

ふりがな 書名	まつのきいせき 松ノ木遺跡Ⅲ
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書 第223集
編集者名	小林真寿
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	20140331
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
ふりがな 遺跡名	まつのきいせき 松ノ木遺跡Ⅲ
ふりがな 遺跡所在地	ながのけんさくしいわむらだ 長野県佐久市岩村田1435-2 他
遺跡番号	102
北緯	36.16.19
東経	138.27.55
調査期間	19980608 - 19980709
調査原因	店舗建設
調査面積	1,500㎡
種別	散布地・集落遺跡
主な時代 遺跡概要	古墳時代前期 遺構一竪穴住居址7（古墳時代前期、不明）、墳丘墓1（古墳時代前期） 遺物一弥生土器（後）、土師器（古前）、須恵器（奈・平）、石器、土製品、鉄器、ガラス小玉
特記事項	古墳時代前期集落、前方後円形墳丘墓の検出。

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第223集

松ノ木遺跡Ⅲ

平成26(2014)年3月

編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込3056
社会教育部 文化財課
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953
TEL 0267-68-7321

印刷所 キクハラインク有限公司

